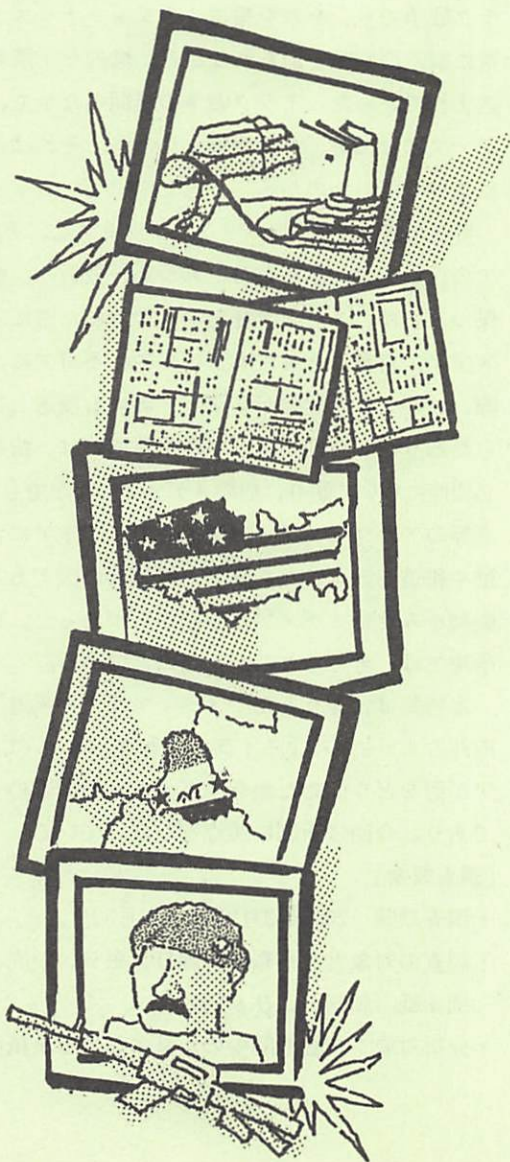


検証 メディア報道の報道

— 新聞のイラク戦争報道分析 —



CONTENTS

検証 メディア報道の報道	2
— 新聞のイラク戦争報道分析 —	
朝日新聞	3
毎日新聞	8
読売新聞	11
産経新聞	12
報告 FCT3月フォーラム	15
『スキャニング・テレビジョン日本版』 を使って学ぶメディア・リテラシー	
・フォーラム記録	
・FCTフォーラムに参加して	16
内容紹介	
『スキャニング・テレビジョン 日本版』	18
特集 子どもの権利とジャーナリストの 責任	20
— ジャーナリストとメディア専門家 のためのガイドライン	
データバンク 国内篇	27

let GAZETTE

編集 Editors 鈴木みどり (発行人代表)
宮崎寿子

編集総務 Managing Editor 新開清子

構成・イラスト Art Director 市川雅美

翻訳 Translation 関根里砂

データバンク Databank Writers
田島知之、中野恵美子、島山亮太

定期購読・発送 Subscriptions & Shipping
佐々木はるひ

印刷 Printing (株)カワムラ印刷

FCT市民のメディア・フォーラムは、1977年の創設以来、視聴者、研究者、メディアの創り手が、性別、年齢、職業の立場、社会的地位を超えて社会を構成する一人ひとりの市民として集い、メディアをめぐる多様な問題について語り合い、実証的研究と実践的活動を積み重ねるためのひろば(フォーラム)として機能してきた。FCT活動は各地でのワークショップやシンポジウムの開催、調査報告書の刊行、など多岐にわたる。なかでも、すべての市民、特に子ども、女性、高齢者、障害者、民族的・人種的少数者などのマイノリティ市民の視座からメディアを読み解き、メディア社会を生きる力の獲得をめざすメディア・リテラシーの研究と実践は、FCT活動の中核をなすものである。

特定非営利活動法人
FCT市民のメディア・フォーラム
Forum for Citizens' Television & Media

理事 鈴木みどり、新開清子、
宮崎寿子、佐々木はるひ、
関根里砂、高橋恭子、
篠塚公 (MLPJ担当)

Media Literacy Project in Japan:
<http://www.mlpj.org/>

事務所: 神奈川県横浜市中区新港2-2-1
横浜ワールドポーターズNPOスクエア内

資料問い合わせ
Fax 0466-81-8307

銀行振込 東京三菱銀行藤沢支店
普通預金 1559401

郵便振込エフシーティー00190-3-84097

購読料: 年2,500円(3回発行)

検証 メディア報道の報道

— 新聞のイラク戦争報道分析 —

4月に完成したビデオパッケージ『スキヤニング・テレビジョン日本版』(STJ)を構成する18のビデオ・テキストのひとつに「メディア報道の報道」がある(P18-P19参照)。これは2001年9月11日朝、偶然、ニューヨークのマソハットンで取材中だったカナダのシティTVが、各国の取材陣にマイクを向け、あの惨事の何を、どう伝えるかを問いかけ、彼らの瞬時の判断とそれを支えるジャーナリストとしての信念について口々に語らせる、興味深いドキュメントである。

2003年3月20日未明(日本時間午前11時過)に始まったイラク戦争でも、それを報道するジャーナリストやメディアは常に瞬時の判断を迫られながら、熾烈な「情報戦争」に巻き込まれていった。イラク戦争の展開のなかで、それぞれのメディアはなにを、どう報道したのか。それはどのような判断に基づいていたのか。

可能な限り多様なメディアにアクセスし、それぞれのメディアの行動を常に冷めた目でみつめ、分析し、検証する姿勢を保つことは、メディア社会を生きる私たちにとって、いや、メディア自身にとっても、いまや、不可欠になっている。実際、このような認識がメディア界にも浸透しはじめているからだろうか。今回のイラク戦争報道では、情報源の多元化の必要性について語り、他のメディア、なかでもアル・ジャジーラ等のアラブ・メディアや米英のメディアについて、その行動や報道内容を私たち読者・視聴者に伝えることに意欲的な姿勢をみせたメディアが少なからずあった。12年前の湾岸戦争時では、考えられなかったことである。

本特集は、そうした「メディア報道の報道」に注目し、国内外のメディアによるイラク戦争報道について、日本のメディアが何をどう伝えたかを検証する分析調査の一環をなすものであり、今回は新聞に焦点をしばっている。

[調査概要]

- ・調査期間: 2003年3月21日～4月30日。
- ・調査の対象とした新聞: 朝日、毎日、読売、産経、の全国紙4紙(朝刊および夕刊)。
- ・分析対象: 調査期間中の4紙における全紙面から、イラク

朝日新聞

戦争を報道する日本および各国のメディアについて、その報道活動の背景や報道内容を取りあげ、分析や論評を加えていると判断したすべての記事。

・分析の手順：①各紙で、該当する記事をすべて取り出し、p3以下に掲載したような一覧表を作成（下に、その読み方）。②一覧表の主な記事の内容について「概要」を作成。③以上を踏まえ、各紙にみる特徴と傾向をまとめた。

＜該当記事一覧表の読み方＞

- ①掲載日：夕刊の記事には夕を。他はすべて朝刊。
- ②記事の種類：ストレートニュース（ス）[その囲み記事区]、特集記事（特）、コラム（コ）に分類。
- ③タイトル／見出し：各記事で見出し（タイトル、コラム名を含む）を大きい順にすべて記入。横書きのものは（ヨコ）と記入。
- ④執筆者：明記されていればすべて書き出し、所属を（ ）に。「見出し」にあれば、その欄に記入したものもある。
- ⑤記事面積：新聞で段組が違い、記事でも1段の長さが異なることから、すべての記事についてタテ×ヨコを計測し、その結果を㎠で記載。写真があれば○、イラストは△。写真の面積も㎠で測定。
- ⑥掲載面：各紙での名称をそのまま記入し、名称が特にならない場合は頁Noを記入。

[分析からみえてきたこと]

本特集では、「メディア報道の報道」という観点からみると、全国紙4紙の報道姿勢が大きく異なることが明らかになった。この違いから、各紙がメディア社会の現実をどのように認識しているか、読者をどう捉えているか、を分析することができるだろう。また新聞は、テレビの報道を批判的に検証することはあっても、自らの業界や自社の姿勢を批判の俎上に乗せることはほとんどない、ということも見えてきた。

FCTでは、こうした結果を踏まえ、新聞分析をさらに進め、イラク戦争のメディア報道について、テレビ分析も加え、検証を続けていく予定である。

本特集では、宮崎寿子、新開清子、関根理砂、高橋恭子、鈴木みどり、が協力執筆している。

2003年6月6日「朝日新聞紙面審議会」で朝日社会部長の「米メディアの対極にいたアルジャジーラを24時間ウォッチした」という指摘にもあるように、朝日にはアルジャジーラに関する記事が多い。3/27「報道も安保戦略、カタール『自由』アピール」主な記事⑥のHPに関する記事、4/1のアルジャジーラ経済部長の投稿記事「私の視点、取材禁止『自由の国』がすることか」⑩では「中東のCNNアルジャジーラ、際だつ現場主義、戦争報道主役に浮上」と大きく取り上げている。⑫では米軍大統領官邸占拠報道に関して、米のFOXニュースとアルジャジーラ報道を対比し、その視点の違いを伝えた。その後、アルジャジーラへの攻撃では、特に⑬の社説でこの事件を論評。記者攻撃とその動揺については4/9、4/10の⑭に関連するいくつかの特集や記事でも掲載している。

他のメディアの報道に関しても多角的に取り上げており、アル・アラビア、中国、英国、ドイツ、フランス、イランのテレビなどについても言及し、各国メディアの特徴を述べ比較する記事が多い（③、④、⑫、⑮、⑯、⑰）。アメリカ国内のCNN、FOX等の報道と、中東メディアとの比較も2度特集を組んでいる（⑫、⑰）。米メディアのキャスターによる自局批判、米国でのジャーナリストの役割と責任を考えるシンポジウムの内容なども掲載している（⑩）。また、国際比較だけでなく、日本における新聞各社、テレビ各局の報道の相違も論じている（③、⑨、⑰）。

アメリカ政府の情報戦略にもたびたび言及し、各局面でどのようなメディア戦略が用いられたか、従軍取材の問題点、従軍記者が体験した報道の難しさ、制度の問題点なども検証した（⑤、⑥、⑧、⑨、⑰）。しかし、従軍取材態勢をとらなかつたテレビ朝日に対する言及はほとんどなかつた（⑨）。

「イラク戦争を問う」などの特集で、イラク戦争に対する識者の論評を掲載している（①、②）。

主な記事の概要

⑬3/22コラム 市民側に立ち記録せよ

アジアプレス野中氏による論評。ジャーナリス

トは自ら戦争現場に立ち多角的に報道する必要があるが、対イラク戦争はホワイトハウス、米軍を発信源とし、情報操作されている。湾岸戦争ではCNNが市民の犠牲を伝えたが、今回米国報道機関は批判力がない。日本のメディアは取材拠点を近隣諸国に移してしまい、現地レポートはフリーのジャーナリストのみ。戦場の実体をきちんと記録するのはジャーナリズムの役目だと指摘。

②3/22コラム 情報操作に抗し実態を

テレビ朝日の川村氏による論評。イラク側が報道に対する検閲を緩和している。湾岸戦争時にはメディア操作に長けた米国が虚報を流し国際世論を動かした。他方、イラク政府は多くの市民が犠牲になったシェルターと粉ミルク工場を公開したのに隣接工場については説明せず不自然だった。今回バグダッドは職住近接の都市構造故に市民が犠牲になる可能性が高く、きちんとした検証が必要だ。従軍記者と戦場記者は違う。戦場記者は事実と多角的に向き合い、爆撃の向こう側にある真実を瞬時の歴史家として記録に残す必要がある。

③3/26特集イラク戦争 テレビの舞台裏

テレビ生中継の舞台裏を伝える記事。外国通信

社からの映像をそのまま流したフジTVや米CNNの24時間中継映像について報告。米主要テレビは24時間以内の映像を共有する「プール制」で無人カメラ映像を流した。日本テレビではフリージャーナリストのリポート映像を使用。演説するフセイン大統領の映像はイラク国営テレビによるもので、ロイターなどが使用した事などを報告。

④3/26ス：戦況は海外TVで

バグダッド市民は中東諸国のラジオを聴き、アブダビ発の「アル・アラビア（アラビア・チャンネル）を視聴し戦況を把握している。このチャンネルは中立の立場から放送しているという。

⑤3/28特集 検証・見えない戦争

バグダッドのテレビ局が2度にわたり空爆を受けたが、報道機関を標的にしたのは「ジュネーブ条約違反」と非難されている。「大統領死亡」はBBCが21日にその可能性を、米ABCが目撃説を流し、イラクの動揺を誘った。またイラク共和国防衛隊幹部に電子メール、携帯電話で寝返りを促すなど情報戦を仕掛けたが、米英側に被害が出てから本当の情報を求めるようになった。

⑥3/29特集 米軍、電波ジャックだ

朝日 新聞「メディアのイラク戦争報道」を取りあげる記事一覧表：2003年3月21日～4月30日

月日	種類	タイトル/見出し	執筆者	面積	掲載面
3/22	コ	イラク戦争を問う/戦場、暴力、報道市民側に立ち記録せよ/野中章弘 アジアプレス代表	野中章弘	418 ○51	オピニ オン (OP)
	ス	情報操作に抗し実態を/川村晃司テレビ朝日コメンテーター	川村晃司	403 ○51	社会
3/23	ス	「情報戦」現場に重圧/攻撃開始、翌日に発表/キティホーク「作戦を変更」と弁明/発射「知らない」/広報官板挟み	石原剛文 (キティホーク艦上)	539 ○2枚計 234	第2社会
3/24 夕	ス	米兵に死者約10人(ヨコ)/捕虜映像米に衝撃/不明も12人「最大の激戦」	三浦俊章 (DC)	610○6枚 計170△	1面
3/26	特	メディア/イラク戦争テレビの舞台裏/最新装置、カメラ肉薄/「これはドラマではありません」/生中継/第一報/映像提供	大塚晶、佐藤純	480○2枚 計119	第3社会 会
	ス	遺体映像、米兵だと自肅公正だ/米TVキャスターが批判/NHK総合は/モザイクなし/BSでは顔隠す	三浦俊章 (DC)	316○2枚 計91	第2社会 会
	ス	戦況は海外TVで/バグダッド/市民		106	社会
3/27	特	検証・見せる戦争/「武力」と「情報」戦いの両輪(ヨコ)「星条旗」すぐ撤去/住民からは敵意/米軍誤算も/捕虜映像これが現実/一体感を期待?		803 ○+△計 284	国際
	ス	力入れる中国メディア(ヨコ)/最も早く「開戦」打電(ヨコ)	栗原健太郎 [北京]	114	
	ス	報道も安保戦略/カタル、自由」アピール		129	OP
3/28	特	検証・見えない戦争/飛び交うウソ・誇張/「大統領死亡」流しイラクの動揺誘う/亡命情報で居場所探る/携帯電話に寝返り促す		835○ 合成235	国際
	コ	サブch/戦況伝える女性記者の視点	深町あおい	161○26	p 34
3/29	ス	米英メディア目立つ揺れ/「報道合戦」過熱で混乱/「米、新型の電磁波兵器使用/「バスラで住民が一斉蜂起(ヨコ)	村山知博 (DC)	263 ○95	国際
	ス	戦争終結の意思、持ちつづけて/オノ・ヨーコさん/平和運動を訴え	福田伸生 (リパブル)	145 ○40	

バグダッドで「米軍はもうバグダッドに入った」などの米軍によるプロパガンダ放送がテレビとラジオで流され、ピラなどもまかれたことを報じ、米軍は飛行機から「電波ジャック」をした可能性があるとしている。また、囲み記事でアルジャジーラのHPが閲覧不可能になり、イラク国营放送のHPも「自由なイラク/テレビ」というタイトルに書き換えられたことも報じている。

③3/31特集 イラク戦争を問う「生中継にも情報操作の危うさ」

マスメディアは湾岸戦争後規制に反発し、今回は従軍記者取材しているが、これは米英軍の立場でしか報道出来なくなるのを狙った隠蔽システムだと武田徹氏が指摘。取材ルールや情報の出所を明示することの必要、情報操作を疑いながら取材源を多元化するだけでなく、戦争の本質を思索する解説、論説の必要性を述べている。囲み記事で空母内の従軍記者による取材での禁止事項、検閲について具体的に解説。

④4/1特集 従軍取材 自問の日々

最前線で従軍取材する野嶋剛記者は兵士とともに迫撃砲の命中に歓声を上げてしまったこと、イ

ラク兵は敵、米軍は頼もしい味方を感じてしまうことを述べる。米国からは地方記者が多く、感情移入した記者に米軍活躍を書かせるのは情報戦略ではないかとする。それでも従軍取材参加は意味があるとし、米軍の情報操作に乗らないように手探りで伝えようとする記者の様子を伝えている。

④4/1夕特集 記者の安全か、報道の主体性か

TBSの平本局長は、空母には記者を乗せたが、陸軍では一旦従軍すれば、戻る手段の確保がないこと、別のチャンネルから情報が入ることから従軍記者を見送ったと指摘。テレビ朝日、テレビ東京も「記者の安全」を考えて見送っている。NHK、フジテレビ、日本テレビは記者を派遣。日本テレビは女性記者の強い希望から派遣。NHK、フジテレビは「報道の主体性という視点からは従軍記者の意味は大きい」としている。

④4/3特集 イラク戦争 記者の役割考え、米でシンポ

3月31日にワシントンで開かれたシンポジウムの報告。従軍記者制度で全体像は見えにくいだが、生々しい情報が聞けるなど、米メディアは全般に従軍制度を好意的に評価。米軍は宣伝道具として

月日	種類	タイトル / 見出し	執筆者	面積	掲載面
3/29	特	米軍、電波ジャックだ(白抜き) / 市民に呼びかけ / 上空からピラも / TVに「戦争終わればイラク自由」[ヨコ] / 「怖い夢終わらせて」 / 「空飛ぶ放送局」投入か ・HPにハッカー / アルジャジーラ、イラク国营TV		666〇4 枚 計 131	社会
3/30	ス	米視聴者調査 / 「戦争見るのは怖い」(ヨコ) / 45%から58%に増	山本克哉 (NY)	86	社会
3/31	特	イラク戦争を問う ・生中継にも情報操作の危うさ [ヨコ] / 評論家武田徹さんに聞く(ヨコ) / メディア側は多元化工夫 / 解説・論説で戦争の本質を ・空母中枢取材では検閲も [ヨコ] / キティホーク乗艦の本紙記者報告 ・従軍取材の基本ルールの概要	上治信吾 石原剛文	642〇(1枚 TV映像)3 枚計 135	オピ ニ オン
4/1	特	従軍取材自問の日々 / 情報の見極めに腐心 / 米兵たちと寝食共に…中立か / 隠れ家にガスマスク…事実か / クータルハイ [イラク中部]	野嶋剛	595〇171 △	1面
	ス	黒幕はラジオ網会社? (ヨコ) / 米大統領批判で「放送禁止」 / 米紙で指摘	五十嵐浩 司 (NY)	127	国際
	コ: 記者 の目	イラク戦争 / 「誤爆」報道流れぬ空母	石原剛文 [艦上]	88	
		イラク戦争 / 「まるで敵国」独仏記者	久田貴志 子(ドーハ)	82	
	コ:	私の視点: 取材禁止「自由の国」がすることか / アルジャジーラ経済部長 アーメド・ムスタファ	アーメド・ム スタファ	352 〇9	OP
特	思い届け、戦場記者 ・フリー遠藤さん「生の姿負い続ける」 ・米CNNプラヒミさん強制退去後も執念		379 〇2 枚計 98	第2社 会	
4/1 夕	特	「記者の安全」か「報道の主体性」か / テレビのイラク報道「従軍」で揺れる判断 / 情報源示しバランス配慮	羽毛田弘 志	623 〇161	p5

みている。米の報道は反戦反米運動を紹介していない。議論は米中心の視点をどう広げていくには至らなかったと指摘。

⑩4/5特集 “中東のCNN” アルジャジーラ

アルジャジーラは英軍の批判に対し独立した報道機関であると言明。総勢30人体制で地方都市まで記者を派遣し、米英軍の流す情報を訂正してきた。視聴者は世界に広がり、アラブへの窓口として米国も接近。イラク情報省はバグダッド担当記者に国外退去を通告。米のミサイル攻撃では「市民を標的にしていない」と語る米軍将校と悲惨な現場を並列して放送。アルジャジーラは12年前のCNNになるかもしれないと結ぶ。

⑫4/8夕特集 視点の違い鮮明

米のFOXニュースとカタールのアルジャジーラの大統領官邸占拠報道を比較。FOXニュースではイラク側の情報がなく、「イラク市民は新しい世界が到来したことを悟り、米英軍を信頼し始めているのでは」などと米軍よりの視点で報道した。(FOXはマードックのニュースコーポレーションの傘下にあり保守的であることを説明) 他方、アルジャジーラは、官邸占拠を簡単に紹介した

けで、米軍の前におびえる市民や負傷者で満員の病院などを映し出した。(カタールにある24時間衛星放送テレビ局であり、BBC経験者が多く、捕虜、兵士の死体映像を流したことから米英から「イラクの手先」と非難されたと説明)。

⑬4/10社説 記者殺傷アルジャジーラだからか

ホテル襲撃で3人のジャーナリストが死亡したことに問題提起。米国ではアルジャジーラへの反発が強い。米軍は自軍に従う記者は守り、従わなければ守らない。米政府はこの事件を調査し責任を明らかにする義務があると論じる。

⑭4/10特集 取材拠点ホテル攻撃

バグダッドで米軍が報道関係者の取材拠点のホテルを攻撃した事件で「ジャーナリスト保護委員会」がラムズフェルド国防長官に調査を求めた。また、攻撃の直後、佐藤記者は頭から血を流した記者の生中継を始め、「狙い打ちです」「悔しい」とレポートした。アラブメディアは「米英軍は真実を伝える者に銃口を向けた」と批判し、ヨルダン・タイムズの社説は「目撃者を残すな」の作戦だとした、と伝える。

⑮4/12特集 仏メディア 市民に焦点

月日	種類	タイトル / 見出し	執筆者	面積	掲載面
4/3	特	メディア：イラク戦争記者の役割考へ、米でシンポ／従軍取材全体見えにくい／米国人、自らの視点広げず／TVの偏り課題なお ・右派に批判の口実、判断ミスだった／アーネット記者、英紙に移り寄稿 ・インタビュー発言（囲みで要旨）	三浦俊幸 (DC)	558 ○76	第3社会
4/5	ス	消えたピース／戦争に配慮、米で広告変更／コメディナーなのに（ヨコ）	山本克幸 (DC)	142 ○56	国際
	特	メディア：中東のCNN、アルジャジーラ／際立つ現場主義／戦争報道主役に浮上／揺らぐ「大本営」／アラブへの窓／国外追放 ・キーワード（囲み）	久田貴志 久田大崎 敦司(ア)	483 ○69	第3社会
4/8	コ	風・ロンドンから：メディアもう一つの戦争／ヨーロッパ総局長外岡秀俊	外岡秀俊	275	国際
	ス	煙る首都乱れる情報（ヨコ）／占領の映像世界に（ヨコ） ・米兵の動き生中継 米FOXニュース ・地響き、道に伏せる人／イラク側「報道陣ツアー」、報道陣を住宅街へ／官邸攻撃時(p38-p39見開き記事のトピック6の2つ)		520 ○151	第2社会(p39) 社会(p38)
4/8 夕	特	視点の違い、鮮明 大統領官邸占領の日 ・戦力の格差誇示【ヨコ】／「否定」数秒だけ／米のFOXニュース ・被災の表情厚くヨコ／「占領」は淡々と／カタールのアルジャジーラ ・キーワード（囲みで2つ）		581 ○2枚計 121	p15
4/9	ス	アルジャジーラ／米軍攻撃に抗議	磯村出(ア)	73	国際
4/9 夕	ス	報道側から抗議噴出／報道陣支障 米軍「メディアに責任」	村山(DC) 磯村出	130	p3
4/10	コ	社説：アルジャジーラだから／記者殺傷(社説の1/2)		238	総合
	特	メディア：取材拠点ホテル攻撃／記者の死、報道に波紋／開戦からの犠牲12人に／攻撃の直後、生中継も／死亡記者の妻／「心壊された」		479 ○85	第3社会
4/12	特	仏メディア／市民に焦点／空爆下、誤爆現場に走り、病院からリポート（ヨコ）／反戦世論も後押し【ヨコ】／「運命共に」／準備周到／91年の教訓	国末憲人 (アンマン)	490 ○115	国際
	コ	私の視点ウィークエンド：イラク戦争特集／記者殺傷 報道封じる意図的な攻撃／新谷恵司 アラビア悟通訳	新谷恵司	46 ○11	OP

10日、戦闘が続く中、フランスのTV局「フランス2」がイラク側のアラブ人義勇兵に同行してバグダッド市内の迫真の映像を流す。開戦後、記者3人、取材クルー12チームが残留して逃げまどう人びと、誤爆現場、病院などのレポートを続行して、被害を受ける庶民の姿を一貫して追う。仏文化相はバグダッド残留記者に敬意を表するとのメッセージを送る。政権崩壊前にイラクにいた仏記者は50人以上だが、米メディアはほとんど引き上げた。戦争終幕からの犯罪の危険性や記者の持つ取材への恐れ、不安、誇りに言及している。

①④/19特集 戦争報道、公平性へ指針

英国公共放送BBCが発表した「戦争指針」をとりあげ紹介。湾岸戦争時にも、アフガン戦争時にも指針を作り、フォークランド以来「我が軍」とは呼ばず「英軍」と呼んでいる。捕虜になった米兵映像も「親族が知られる前に放送してはならない」とする指針に則って扱った。BBCはバランスを保ち、米軍当局から「扱いにくい連中」と呼ばれていると、英紙ガーディアン記者がコメント。指針の要旨とともにBBC批判をした英政府に対しジャーナリストの国際団体「国境なき記

者団」が抗議を行ったという記事も掲載。

①④/23特集 検証「大統領の戦争：考え抜かれた従軍記者制度」

ベトナム戦争、湾岸戦争の経験を踏まえ、米軍は従軍取材を広報戦略として捉え、最後まで軍と同行することを条件に、部隊と運命をともにすることで軍の所在を明らかにさせないなど、考え抜かれた制度だった。米公共放送は2度、検証特集を組んだが、その番組内で前線に赴いた記者は軍に好意的で情報はきちんと提供されたと語った。しかし少数だが、視野が狭く隊から抜け出せない、メディアを「軍隊の応援団、宣伝機関」に変える危険性があるとコメントした記者もいた。英国では2月中旬にはイラク戦争反対は52%だったが3月下旬には賛成が54%になり、英国防省は従軍取材が連合軍支持を多数派にするのに役立ったと評価した。

①④/23朝日紙面審議会：新聞独自の分析力を

新委員四人が審議会に臨む抱負について語る。野中章弘氏は、イラク報道では米英軍従軍記者が多く、イラク側情報が限られており、多面的な報道が必要と指摘。浅岡氏はイラク戦争を考える場

月日	種類	タイトル/見出し	執筆者	面積	掲載面
4/15	ス	捕虜救出に沸く米国民/戦争イヤでも「兵士支持」/「英雄」ドラマ化の話も/大看板/2人だけ	福島甲二 (NY)	294	社会
4/19	特	メディア：戦争報道、公平性へ指針【ヨコ】/英BBCバグダッド空爆前に公開(ヨコ)/「我が軍」と呼ばず「英軍」/BBC非難の英政府に抗議/ジャーナリスト団体 ・主観的見方/除くべきだ(ヨコ)/チーフプロデューサーに聞く ・指針の要旨(囲み)	小川雪(ロンドン) 中井大介(バグダッド)	641 〇72	第3社会
4/23	特	検証/大統領の戦争/情報戦考え抜かれた/従軍記者制度(ヨコ) ・昨秋には米長官意向/広報戦略 ・イランのTV見た市民/大本営発表 ・電波ジャック/巧妙な心理戦(ヨコ)/大量「説得」兵器 ・一体意識が米軍寄り生む/おそろかにされた全体像/ブルッキングス研究所上級研究員/スティーブン・ヘス氏(囲み) ・携帯翻訳機/米軍前線に(ヨコ)/アラビア語で意思疎通	三浦俊章(DC)、谷田邦一、中井大助、石原剛文(バ) 板尻信義(DC) 和泉(DC)	1328 〇(1枚は合成)2枚計345	p 8
	コ	朝日新聞紙面審議会/新聞独自の分析力を(ヨコ)/新委員に4氏が就任/イラクの真実伝えたか/野中章弘氏(アジアプレス代表) 「市民の視点」求めたい/浅岡美恵(弁護士) 「情報戦」を突破できず/佐藤俊樹(東京大学教授) 紙面との「対話」楽しみ/渡辺正太郎(経済同友会)	野中章弘 浅岡美恵 佐藤俊樹 渡辺正	230 〇53 230〇53 230〇53	p 17
4/24	特	検証/大統領の戦争/メディア/米とアラブ/「視点」衝突(ヨコ) ・アラブ犠牲性者重視で存在感/米TV界「FOX効果」が加速 ・「進攻」「侵攻」割れた日本 ・誤報の構造/兵器の知識乏しい/部隊情報を丸のみ(ヨコ) ・情報戦に使われた?/副首相亡命/シリア派蜂起… ・地上戦開始-米英仏独中はどう報じたか(囲み) ・各国の報道陣(ヨコ)/述べ3600人超/空爆後もイラクに200~300人 ・取材記者ら15人死亡(ヨコ)/行方不明は2人(囲み)	中井大助(バグダッド)山本克哉(NY) 佐藤純 村山知博(DC) 久田貴志子(ドーハ)	1324 〇+△(合成一部グラフ) 279	
4/30	コ	海外メディア/深読み/「解放」は神の理念で/意図を超え過剰反応も/ブッシュ氏と宗教(ヨコ)/高成田享(論説委員)	高成田享(論説委員)	486 58	△ OP

として新聞は重要であり、新聞への信頼が分散化した今、事実報道に加え「なぜそうなのか」というメディアの説明が必要、という。佐藤氏はベトナム戦争時の「政府が隠しマスコミが暴く」報道から、今回は権力の「見せたいもの」以上は見せられなかった報道だったと述べている。

⑨4/24検証 大統領の戦争／メディア

フセイン大統領像が倒された時に「騒いでいるのは声の大きい少数派」とするカタールのアルジャジーラと「暴君は倒れ、バグダッドは解放された」と報ずる米FOXニュースを比較。アラブ各局は主に空爆や戦闘で犠牲になった市民に注目し、米側のフセイン批判もそのまま伝えた。FOXは「一貫して米軍の戦いを賛美した」(ニューヨークタイムズ紙)。同じ倒れるフセイン像がメディアのフィルターによって印象も理解も異なるとする。また『『進攻』『侵攻』割れた日本』では、地上戦開始を伝える各国新聞の見出しをとりあげ、米国、英国、ドイツ、中国、日本の各新聞が「進攻」、「侵攻」、「進撃」など、どんな言葉で表現したかを伝えている。

毎日新聞

毎日新聞には「従軍取材」の問題点を厳しく指摘する記事が多く見られる(3/22、3/25夕、①、⑤、⑥、⑨、など)。⑥では、「正義なき戦争」の既成事実化に加担していたのでは、と記者自らがその体験を厳しく問い、今後は米国が国際法に反した「侵略行為」に乗り出さないよう訴え続けていきたいと書いている。

すべての記事に記者の署名があるのは、他紙と大きく異なる毎日の特徴である。記者名を明記することで、3/22特集「取材の最前線」、4/4特集「各国の記者が伝えるバグダッド」のように、各地で取材する記者の顔が見え、戦争をみつめる人間の目を感じさせる多角的な構成を可能にしている。

「戦争とメディア」が問題になればなるほど、メディア・リテラシーが必要になると指摘する記事もある(⑤、①)。①の記者は「映像を送る側だけでなく、見る我々も」と、市民の側に身を寄せることを忘れていない。③の特集でも、市民がインターネットにより、オルタナティブな情報を主体的に得ることができることに言及する。

毎日新聞「メディアのイラク戦争報道」を取りあげる記事一覧表：2003年3月21日～4月30日

月日	種類	タイトル / 見出し	執筆者	面積	掲載面
3/22	特	取材の最前線から：記者が見たイラク戦争(ヨコ)/クルド人が化学兵器を恐れる気持ちは、想像もつかない/現場が遠い。情報から隔離されている/戦争懐疑論も消えつつある(ヨコ) ・機密を理由に報道に制約/米空母キティホーク—ペルシャ海上 ・防毒マスクを肌身離さずクウェート/生の表情見えづらいだち/アンマン—ヨルダン ・“音なし”米中東軍司令官/ドーハ—カタール ・氷点下の冷え込みに震え/アルビル—イラク北部・クルド人地域 ・米軍動かず平穏が続く/ディアルバクル—トルコ	井上卓弥(艦上) 井田純(クウェート) 春日孝之(アンマン) 田中洋之(ドーハ) 藤生竹志(アルビル) 山科武司(ディアルバクル)	991 ○2枚計 176 △28	人びと 民族 地球
3/24 夕	ス	米兵捕虜イラクが公開/米兵約10人死亡/12人行方不明に	福島良典、田中洋之(ト) 佐藤千矢子(DC)	232	1面
	ス	捕虜映像の自粛要請(ヨコ・白抜き) ・米国防総省「ジュネーブ条約違反」/米メディアほとんど流さず ・イラク 捕虜の公開両刃の剣/扱い次第で反戦機運に水 ・イラク当局の対応を非難/中東軍司令官 ・米のえん戦感狙う/小池政行 日本赤十字看護大教授・国際人道法 ・ことば ジュネーブ条約	佐藤千矢子(DC) 小倉孝保(アンマン) 福島良典(ト) 小池政行	707 ○142	ま ち く に 世界
3/25 夕	特	管制と情報戦の中の戦争騒動(ヨコ)/現場に多くの問題/虚々実々/映像の意味/乏しい公開 ・政府・軍とメディア 繰り返される確執	長沢晴美 清水忠彦	455 ○75	社会 事件 ひと 話題
3/27	特	追跡イラク戦争/米、情報操作に苦心(ヨコ)/「体制内部崩壊」狙い/閣僚・軍幹部ら「憶測発言」も/化学兵器で駆け引き/捕虜映像の衝撃/大統領の生死と統制権 ・イラクも生存かけ心理戦/アラブへ影響狙う/テレビ映像の影響/米英情報の否定(2、3面の見開き記事)	小倉孝保(アンマン) 河野俊史、斗ヶ沢秀俊(DC)	888 ○86	総合 ニュース の 焦点
3/31	特	検証戦争とメディア：イラク戦争の「テレビ報道」上 ・「映像が銃弾にもなる」(ヨコ)/公平さに腐心(ヨコ)/多面化、多国籍化する/湾岸戦争の反省はみられるが/問われる「質」への転機 ・戦争とは破壊される建物であり血まみれの子供の死体である(ヨコ)/「攻撃側の動きばかり伝えるのは戦争への加担」(ヨコ)/池澤夏樹さん	網谷隆司郎 池澤夏樹(作家) 聞き手・中島みゆき	740 ○2枚計 71	アミューズメント・パーク

捕虜映像については、米国捕虜の扱いにのみでなく、②ではイラク兵、米兵、英兵遺体記事について各国メディアの扱い方を述べ、写真もロイター通信によるイラク兵捕虜映像を使用している。また、米国防総省の放送自粛に対し、「イラク兵捕虜映像を認める一方で、米兵の人権のみ守れと主張するのは矛盾する」とのコメントを掲載し、双方のバランスをとっている。

海外メディアを取りあげる記事に比較して、日本のメディアに関する報道は少ない。⑦で服部氏がTBS「ニュース23」などと比較し、NHKニュースは冷静な視点を欠いていたと指摘するのみで、日本の新聞、テレビについて具体的な分析はされていない。

主な記事の概要

①3/31特集：検証イラク戦争の「テレビ報道」上
湾岸戦争時、米軍提供の映像を大量に放送した日本のテレビ界は、その反省から映像の多角性を求め、海外各局と契約した。米4大ネット、CN

N、BBCなどの他に戦争反対の国の仏2、独ZDF、アラブ世界のアルジャジーラ、アブダビTVなどである。その結果、イラク国内からの映像は格段に増えたが、映像そのものが戦争当事国の「武器」「弾薬」にもなるという新たな現実が生じている。日本のテレビ局の基本姿勢が問われるなか、英BBCの戦争報道指針が着目されている。制作側も、見る我々も多角的・多面的な情報収集力と読み解く力が求められる時代になった。

②4/1特集：検証 捕虜映像苦悩する報道

捕虜映像について、人道的立場を考慮すべきとする一方、顔のぼかしは、真実を伝えるという報道の役割の自己規制になるとの議論がされている。英国では、イラク兵捕虜映像を全国紙4紙の内、ガーディアン紙のみ、英国防省との取り決め通り顔をぼかした。米兵捕虜映像では、インディペンデント紙が顔を修正した。さらに英国兵の遺体映像は、戦争賛成の大衆紙サン紙に載り、「我々の息子たちが処刑された」と大見出しで伝えられた。

月日	種類	タイトル/見出し	執筆者	面積	掲載面
4/1	特	検証戦争とメディア：捕虜映像苦悩する報道/人道的配慮か「真実」優先か/「顔ぼかし」処理(ヨコ)/「自ら規制」憂慮 ・英国の場合/国防総省、放送自粛を要請 ・米国の場合/「戦争の本当の姿を」 ・衝撃と畏怖/作戦…軍事理論の研究書名に由来 ・殺人者が見えない/反戦機運を生む可能性(米国メディア論専門家に聞く)	岸本卓也 (LA) 佐藤由紀 (LA) 門田陽介 藤原章生 (DC)	1118 ○514	めでい あ&メ ディア (M&M)
4/3	ス	イラク前線写真を合成(ヨコ)/社告で謝罪、写真記者を解雇(ヨコ)/LAタイムズ紙31日付1面掲載(ヨコ)	佐藤山紀(ロサンゼルス)	245 ○3 枚112	ま ち く に 世 界
4/4	特	追跡イラク戦争：アルジャジーラ記者追放/謎多いイラクの決定(ヨコ)/秘匿情報流した可能性も/禁止は一時的との見方/「カタルが本拠地」も関係か(ヨコ)	小倉孝保(カイロ) 田中洋之(アッサイリア基地)	500 ○54	総 合 ニ ュ ー ス の 焦 点
	特	各国の記者が伝えるバグダット(ヨコ) ・息ひそめたくましく/物資豊富バスラから新鮮なトマト/市民生活 ・朝からミサイルの雨/「湾岸」より精密 町が息を止める/空爆 ・記者に強いストレス/融通きかぬ当局、外国人は外出危険/取材活動	堀内宏明(シドニー) 澤田克巳(ソウル) 成沢健一(香港) 斎藤義彦、杉尾直哉(外信部)	993 ○2枚計 301	人 び と 民 族 地 球
4/7	特	検証戦争をメディア/イラク戦争の「テレビ報道」下 ・「第3の情報源」ネット台頭(ヨコ)/「大手」に不信抱く人増え ・「真実」求め積極的な参加 ・歴史の流れや文明論からの論議を(ヨコ)/拓殖大学教授重村智計さん	中島みゆき 聞き手・萩野祥三	750 ○2枚計 77	ア ミ ュ ー ズ メ ン ト ・ パ ー ク
4/9	ス	メディア砲撃強い批判/「故意の可能性」アルジャジーラ局長/米に真相解明求める/市民団体	斗ヶ沢秀俊(DC) 田中洋之(ドーハ)	523 ○2枚計 233	ま ち く に 世 界
4/10	コ	イラク戦・「従軍」報道：メディアは取材過程開示を/世論受け狙う米とイラク/音好宏(上智大学助教授・メディア論)	音好宏	442 ○14	文 化 批 評 と 表 現
4/11	特	検証戦争とメディア：情報の相対化が必要/「戦争報道」著者武田徹さんに聞く	聞き手・清宮克良	344 ○8	事 件 話 題 雑 覧
4/15	コ	記者の目：従軍取材の意義(ヨコ)/兵士の内面まで踏み込み(ヨコ)/戦争の問題点明らかに	井上卓弥(米空母マティホーク)	518 ○2 枚計62	オ ビ ニ オ ン ワ イ ド
	コ	メディアを読む 放送：戦時下に必要な冷静な視点/服部孝章・立教大教授(メディア法)	服部孝章	284 ○12	(M&M)
4/18	ス	絶えぬ妨害苦闘続き/自由取材へ奮闘クルド独立系新聞(ヨコ)	藤生竹志(アルピル・イラク北部)	252 ○29	人 び と 民 族 地 球
4/22	コ	新聞時評：イラク復興は市民との対話が重要/エンベッド取材/目的はテロ根絶/小川忠 国際交流基金課長	小川忠	306 ○11	オ ビ ニ オ ン ワ イ ド
	コ	メディアを読む：新聞：問われ始めた情報の質/フリージャーナリスト・玉木明氏(ヨコ)	玉木明	270 ○12	(M&M)

このように英国の新聞界はイラク戦争を容認する新聞と懐疑的な新聞にわかれ、その記事の扱ひ方も異なる。米国では、軍の放送自粛要請に従い、米軍捕虜映像はCBS、CNNで映像処理したものの一部を放送し、ABC、FOXは使用しなかった。メディアの自粛に対し、湾岸戦争報道のように「戦争を浄化してはならない」とサンディエゴ・ユニオン・トリビューン紙記者は指摘する。

③4/7特集：検証イラク戦争の「テレビ報道」下

イラク戦争報道が情報戦の色彩を強めているなか、マスメディアの報道に疑問をもち、インターネットを「第3の情報源」として使用する市民が増えている。衛星テレビネットワーク「アルジャジーラ」をはじめ、日本語で見られる「日刊ベリタ」「ホットワイアード」などを紹介する。イラク攻撃を機に、自らサイトで情報を判断してとらえ、同じ視点の人とシェアすることもできる。

④4/9夕 ス：メディア砲撃強い批判

「アルジャジーラ」支局と多数の記者が宿泊するパレスチナホテルが米軍に爆撃され犠牲者が出た。言論の自由の確保をめざす米の「ジャーナリスト保護委員会」は、米国防長官に真相究明を求める書簡を送った。さらにアルジャジーラの施設は故意にミサイルの標的にされた可能性があり、全容調査と結果の公表を求めた。一方、アルジャジーラの局長は記者会見で「支局は住宅街にあり、ペンタゴンは場所を正確に知っていた」と強調。

⑤4/10コラム：メディアは取材過程開示を

音好宏氏による論評。この戦争では600人余の従軍記者や、バグダットで残留許可を得た記者などにより、戦況がほぼリアルタイムで視聴者に届けられた。米では先制攻撃の正当性を、またイラクでは不利な軍事力や米軍攻撃の不当性を、国際社会に納得させるための「装置」としてメディアが機能した。瞬時の判断の要求される戦争報道において、メディア側は取材過程や、ニュース・記事にするに至った判断過程を開示すべきである。また「メディア利用者」はメディア・メッセージの冷静な読み取りが必要であり、新しい戦争の時代の柔軟なメディア・リテラシーが求められる。

⑥4/15コラム「記者の目」従軍取材の意義

米空母キティホークで海軍に従軍した日々を振

り返り、従軍取材の意義を自ら問う。各国メディアは、戦闘をじかに目撃し判断する機会を与えられたようにみえる。しかし現行では米軍に利用される危険性が強い。あえて従軍取材の意義とは、目前の戦闘に固執せず、一人ひとりの米兵の道徳心や迷いを知り、戦争の持つ問題点を浮き彫りにすることである。

⑦4/15コラム：戦時下に必要な冷静な視点

服部孝章氏による論評。6日放送のNHKスペシャルでは、イラク市民の厳しい生活ぶりを冷静な目で伝えていたが、NHKニュースではこの視点を欠いていた。米ABC（NHK・BS放送）はアカデミー賞授賞式でのムーアのブッシュ批判の演説をカットし、武力行使に協力する姿勢をみせた。従軍報道などの戦争アクション映画のような映像と、アルジャジーラによる被災した市民の映像も共に、戦争の一断片に過ぎない。戦時下では、メディアは宣伝機関とみなされないためにも、冷静で多角的な視点からの報道が必要。

⑧4/18囲み記事 絶えぬ妨害 苦闘続き

イラク戦争についてのクルド人の声を、地元メディアはどのように伝えているかを取材する。クルド独立系新聞「ハウラティ」(市民の声)記者ゴバンド・ババン氏によれば、フセイン大統領の圧制に加え、イラク反体制組織『クルド民主党』の圧力も受け、報道の自由は確保できないという。同紙は2000年に創刊し、発行部数約1万部の週刊誌で、オランダにも拠点を置く。取材・報道は34人がボランティアで担う。フセイン政権を倒すための戦争に基本的に賛成という論調を貫く。

⑨4/22コ「新聞時評」：問われ始めた情報の質

小川忠氏による論評。9日朝刊25面によれば、米メディアはエンベッド取材をおおむね評価し、その読者にも好評というが、この取材方式には多くの問題がある。第1に記者にとって生の情報であるため、読者に訴求力はあるが、記者が体験するのは局地的な戦闘に過ぎない。第2に背景にあるアラブの歴史や社会的文脈への目配りが欠けている。第3に記者は傍観者でなくなる。以上であるが、本社があらかじめ取材過程のルールを読者に開示したのは、責任ある対応であり評価できる。

読 売 新 聞

読売新聞では、イラク戦争開始後の3月24日にニューヨーク特派員が、30日には上海特派員が、それぞれの国における主要新聞の内容とその特徴を紹介している。その一方で、日本の新聞報道に関する読売新聞記者の記事は見当たらなかった。

日本国内の新聞報道については、戦争後に「主張 提言」として掲載された3つの記事の一つが、記者ではなく外部の執筆者によって書かれ、「朝日」「毎日」の両新聞への批判的意見を含んでいる。これが、国内での新聞報道をテーマにした唯一の内容である。また、それが記者による記事ではなく、コラムとしての検証に限られたことも特徴的である。

そもそもメディアによるイラク戦争報道を取りあげる記事は多くなく、あっても、テレビ報道に関するものが中心となっている。写真もテレビ映像から採取したカットを挿入するケースが多かった。たとえば①のように、フリー記者の活躍を中心に湾岸戦争との違いに言及している「テレビ情報BOX」や、②の捕虜映像の扱いに関する問題など、映像報道の問題を掘り下げた解説部記者による記事が代表的である。双方とも、文章に「情報戦」という言葉を用い、戦争報道における情報

操作の可能性を示唆した点で共通している。また③～⑤の記事も米側の規制や情報操作をはじめとする戦争報道の問題を突くコメントが含まれており、読売新聞におけるイラク戦争報道に関する記事は、(テレビを中心とした)報道が操作されているという印象を与えるものとなっている。また、④は、湾岸戦争でのCNNを中心とした報道と対比させながら、各局の入手した映像や生中継の豊富さなどの特徴とともに、戦争自体が宣伝戦であったことも付け加えている。しかし、記者自身のコメントとしては記事の終わりに、「ジャーナリストが自分の目と耳で事実を確かめるべき」という牛山純一氏の言葉を引用し、「肝に銘じたい」と結ぶにとどまった。

主な記事の概要

① 3/24夕刊コラム イラク戦争報道「湾岸」との違い

湾岸戦争時に比べバグダッド市内からの中継が目立つイラク戦争報道。その背景にはフリー記者の活躍がある。CNN中心だった湾岸戦争での反省から、放送局がアル・ジャジーラやアブダビテレビとの契約で複数映像を確保し、米英軍に記者を従軍させたのも大きな違いである。またイラク軍兵士投降の映像が流されるなど「情報戦」が特

読売新聞「メディアのイラク戦争報道」を取りあげる記事一覧表：2003年3月21日～4月30日

月日	種類	タイトル/見出し	執筆者	面積cm ²	掲載面
3/24	ス	連日別刷り 米紙「総力戦」(ヨコ) / 戦況・検証記事など多角的に(ヨコ)	河野博子 (NY)	293 ○74	社会
3/24 夕	コ	テレビ情報BOX: イラク戦争報道「湾岸」との違い(ヨコ) / フリー記者活躍 / 従軍取材目立つ / 中東のメディアからも映像 / フリー記者 / 「湾岸」の反省 / 従軍リポート / 番組差し替え		518 ○104	14
3/26	特	捕虜映像公開 狙いは? / 米「人道的待遇」アピール / イラク 米国民の厭戦期待 / 行き過ぎた宣伝・情報戦(ヨコ) / ジュネーブ条約抵触(ヨコ)	勝股秀道(解説部)	588 ○2枚 計75	解説
3/30	ス	関心重大 中国的報道(ヨコ) / 最新兵器・戦術を注視 / イラク戦争 / 中国メディア	伊藤彰浩(上海)	380 ○80	国際
4/3	特	二つの戦争? メディア報道 ・愛国ムード刺激 / 「戦果」を前面に / 米テレビ(ヨコ) ・市民へ興奮強調 / 生々しいシーン / アル・ジャジーラ(ヨコ)	波津博明(解説部)	448 ○64	解説
4/3 夕	ス	写真合成 / 戦場で(ヨコ) / 米LAタイムズ紙、カメラマンを解雇(ヨコ)	森田清司(ワシントン)	379 ○2枚計 248	2
4/12	特	イラク戦争 日本のTV どう伝えたか / 海外局から多角的映像(ヨコ) / 最前線の生中継も / 宣伝戦、逃れられず / 「真実」検証(ヨコ) / 今後の課題(ヨコ)	鈴木嘉一(解説部)	606 ○2枚計 121	解説
4/21	コ	主張 提言: イラク戦争とメディア / 国連主義 基本は「日米」(ヨコ) / 北岡伸一氏 東京大学教授55歳	北岡伸一	1048	17
		「当局発表」に頼る危険(ヨコ) / 江畑謙介氏 軍事評論家54歳	江畑謙介	○4枚計 117	
		「侵攻」と表現した責任 / 佐瀬昌盛 拓殖大学海外事情研究所長68歳	佐瀬昌盛		

徴であることも印象付けた。

②3/26特集 捕虜映像公開 狙いは？

イラクによる米兵の捕虜映像公開はジュネーブ条約に違反する行為だと米国が反発している。しかし、捕虜を映像化したのは米英軍が先で、捕虜へのきちんとした待遇を公表する目的であった。フセイン政権も捕虜映像を宣伝材料にしている。捕虜の映像化は情報戦や宣伝戦の行き過ぎた結果であるといえる。日本も同条約を批准しているが、捕虜をどのように扱うかは、有事法制が未整備のため、決まっていない。

③4/3特集 二つの戦争？メディア報道

イラク戦争を伝える米、アラブ両テレビの報道姿勢は対照的である。米国で最も保守的なFOXニュースの画面には常に星条旗がはためき、従軍記者の戦果報告が続く。一方、アル・ジャジーラは民間被害を重点的に報道し、生々しい遺体映像を流している。しかし米テレビは誤爆被害者の報道を避けている。米視聴者はこのままでは民間被害を実感できず、アラブ民衆の反米感情も理解しにくくなるだろう。米国民が政治的判断を誤ることにもなりかねない。

④4/12特集イラク戦争 日本のTVどう伝えたか

イラク戦争では国内外の報道陣を受け入れたことが特徴で、フリージャーナリストによる空爆下のバグダッド中継もあった。映像が豊富な今回の戦争だが、情報操作に振り回された印象も否めない。映像のインパクトは強く、一人歩きする恐れもある。各局は撮影者の立場や意図など、映像の出所を明示する必要があるだろう。

⑤4/12コラム 『当局発表』に頼る危険

米英軍の記者会見は開戦後3日間開かれず、その後も不定期で発表内容は大まかなものだった。また従軍記者方式を採用するも、実際にはプレスへの取材規制が課せられた。プレスは軍事に関する専門的な知識がないと「当局発表」に振り回される。IT時代の戦争への理解不足からのを外れた報道も目に付いた。メディアが勉強をしないと大衆も困惑する。メディアは傍観的な戦争報道に慣れてしまったようだが、戦場は戦場であるという事実を再認識すべきであろう。

産 経 新 聞

イラク戦争報道のあり方そのものについて論評するコラムが多い。①では、NHKの報道は常軌を逸するまでに偏っているとし、⑤では、情緒的報道がイラクの独裁者を利すことになると指摘。例として、米英軍のイラク領突入を中立的な「進攻」ではなく、「侵攻」「侵入」と表記した新聞、「人間の盾」に加わった人々を英雄扱いする記事として挙げている。こうした報道は世界中に反戦デモがあふれているかの印象を与え、仏独露が正義の外交を展開しているような錯覚を与える、と論じる。

ベトナム戦争を持ちだし、客観性を欠いた報道は過去にもあったという(⑤)。そのベトナム戦争経験者が米国では、イラク戦争報道にあたっているケースがあるとし、そうした記者は「過去の栄光をノスタルジックに再現し、大義のために戦う基盤を背後から崩し始めた」と書く米国の新聞記事を紹介している(③)。⑥でも、ベトナム戦争を引き合いに出し、その報道の誤りが検証されるには数年を必要としたと述べ、ベトナム報道が錯誤だったという印象を読者に与えている。加えて、初めに米国批判ありきでは、報道の目が曇る。社会主義の郷愁があるからか、と間接的に他紙を批判。

⑦の特集・4紙の社説検証では、イラク戦争を論じる各紙の社説を分析し、米英武力行使を支持する読売・産経と反対する朝日・毎日に二分されると論評。他紙と比較することで、産経独自の論調を読者に強く提示する意図がうかがえる。反戦の立場をとる有識者や市民団体のコラムは全くない。その一方で、⑧では、朝日新聞のコラムで卓球の福原愛に戦争見識を問うのは一種のやらせであり、瀬戸内寂聴との談話も事前内容をつめていると批判。⑦で自紙の姿勢について述べるように、「独裁者を排除するためには米国の武力行使やむなし」という論調で全体を貫いており、オルタナティブな視点は排除されているといっても過言ではない。中東のCNNといわれるアル・ジャジーラについても、米英捕虜映像を放送したことで、米欧から批判されているという文脈で紹介し、

「負傷者の映像を最も多く流しており、米兵からは「封じ込めたい存在」である、と論じる (②)。

主な記事の概要

① 3/21 正論 国際情勢の急速な変化に備えよ

テレビ報道のあり方は常軌を逸している。悪の権化をブッシュ大統領、反戦世論の理性をシラク大統領にしつらえ、米国が国際社会で孤立しているかの画像を提供する。NHKは少数者による反戦デモが世界的に広がっていると論評を加えるなど、その偏り方は尋常ではない。国際情勢は急速に変化している。一部のマスコミがつくり出した俗論にとらわれることなく、小泉首相には、東アジアの危険に際し、覚悟を決めてほしい。

② 3/29 衛星TV「アル・ジャジーラ」国際的信頼獲得へ正念場

米兵捕虜の映像を放送したアル・ジャジーラが、「イラクに有利な報道を行っている」と非難されている。これに対し、アル・ジャジーラは、双方に起きていることを伝えることが使命と反論。アル・ジャジーラは米英から敵視され、国際的信頼を得られるかどうかの試練を迎えている。

③ 4/3 コラム イラク報道にベトナムの影

米国のマスコミではベトナム戦争で活躍した記者がイラク戦争の報道にあたるケースが少なくない。こういった古手記者は過去の栄光をノスタルジックに再現し、若者が大義のために戦う基盤を背後から崩していると米国有力紙は批判している。ベトナム駐在経験のある筆者は、米国の中のベトナムが現在も複雑な反応とイメージの輪を広げていると述べている。

④ 4/12 コラム 予測ミスの「戦犯」追及

米国ではイラク戦争の見通しを間違えた言論人や学者、政治家の責任を問うため、一番ひどいミスを犯した人の名を「恥辱の殿堂」に記録しようという動きが起きている。日本でも朝日新聞などイラク戦争の展望について長期化、泥沼化と断言する向きがあった。過ちの責任所在を明確にすることは今後の我が国の対外政策の評価でも重要だ。

⑤ 4/14 コラム 報道のあり方を問われた

イラク戦争の情緒的報道がいかにか独裁者を利したかを肝に銘ずるべきだ。ベトナム戦争当時、メディアが南ベトナム解放民族戦線を民衆蜂起の解

産経 新聞「メディアのイラク戦争報道」を取りあげる記事一覧表：2003年3月21～4月30日

月日	種類	タイトル/見出し	執筆者	面積cd	掲載面
3/21	特	イラク戦争/米の戦略/万全のメディア対策/人道支援前面に(ヨコ) / 国際世論対策見据(ヨコ) / 24時間態勢で情報発信	檀山幸夫 (DC)	336	総合 P 5
	コ: 正論	イラク戦争/国際情勢の急速な変化に備えよ/本質見ないテレビ報道の偏向(ヨコ) / 杏林大学総合政策学部教授 田久保忠衛	田久保忠衛	446 ○60	オビニ オン
3/24	特	イラク戦争/米の戦略/やっと初会見/フランク司司令官/メディア戦略? 全体把握しにくく(ヨコ)	松尾理也(クウエト)	301 ○169	総合 p 5
3/25	コ:	2003 世界は日本・アジアをどう伝えているか/多難反映 開戦前から報道先行/イラクの「戦後再建」(ヨコ)	千野鏡子	391 ○14	総合 p 3
	特	イラク戦争 米軍捕虜/捕虜映像「国際法に違反」/米、強く反発・戦後に戦犯告発も/虐待警戒「国民さえ迫害」/ジュネーブ条約・米TV、放映自粛相次ぐ/米軍が配慮要請・地域で支えあい、使命感揺るがず(ヨコ) / 湾岸戦争時の米兵捕虜家族	土井達士 近藤豊和 (DC) 岡部伸	650 ○81	総合
3/27	コ: 主張	戦場の真実を見極めよう/イラク戦争(ヨコ)		196	総合 p 2
	コ	黒岩祐治の眼/イラク戦争/経済/「米の孤立」だけは避ける/歴史のなかでどう語られるか(ヨコ)	黒岩祐治 (フジTV)	308	総合 p 6
3/29	特	イラク戦争/報道/衛星TV「アル・ジャジーラ」国際的信頼獲得へ正念場・米欧から非難集中/捕虜や戦死者の映像放送(ヨコ) / カメラマン/1人不明に/アル・ジャジーラ ・米NY証取が取材資格剥奪/ハッカー攻撃 サイト「破壊」 ・英「限界を超えている」/現地司令官 宣伝利用を警戒	村上大介 (カイロ) 気仙(DC) 松尾(クウエト)	636 ○60	総合 p 2
3/30	特	イラク戦争/情報 / 心理戦も激烈 ・軍幹部らを懐柔/CIAが主導/安全と地位約束「寝返り」迫る ・反米気運あおる(ヨコ) / イラク「密着」 / 欧州でも注目/アラブ衛星TV・メディアにいら立ち/米政権/戦争終結時期や作戦変更間われ「バカバカしい」(閉み)	加納洋人 (アンマン) 気仙英郎 (DC)	908 △123	総合
4/3	コ	古森義久の眼/イラク報道にベトナムの影(特別編集委員)	古森義久	308	総合 p 5
4/4	コ	War Correspondent(戦争特派員) / 取材戦争も熾烈/[戦場ツアー]に記者殺到(ヨコ) / 独自潜入では死亡例(ヨコ)	松尾理也 (ク)	230	総合

放軍として扱い、反米運動が盛り上がった。今回もその教訓は生かされていない。「人間の盾」に関わった人々を英雄扱いした記事があった。こういった報道は世界中に反戦デモがあふれ、戦争を阻止した仏独露が正義の外交を展開しているような錯覚を植えつける。

⑥4/14産経抄

米英軍がイラク領に入った行為を「侵入」と書いた新聞があった。同じ新聞が侵略したはずの軍隊にイラク市民が歓声をあげたと報道している。この予測ミスをした新聞は今、「米国戦後統治の難しさ」にカジを切り替えている。初めに米国批判ありきで、反戦反ブッシュの霧がかかると、報道の目が曇る。それは社会主義の郷愁からか。

⑦4/18特集 4紙の社説検証／イラク戦争

朝日、毎日、読売、産経の主要4紙のイラク戦争に関する社説論調を検証し、米英の武力行使を支持する読売・産経と反対する朝日・毎日とに二分されたと論じる。朝日はイラク査察の継続を求める仏独側に立ち、米国や小泉首相の対応を批判した、と分析。毎日米英の「見切り開戦」は国

際ルール違反であるとし、世界規模の反戦運動は多くの市民がイラク戦争に正当性を感じていない結果であると論評。読売は長期にわたる圧政から国民を解放した点から、米英の選択は正しかったと主張していると指摘。日本にとって、安全保障上頼りになるのは米国であり、日米同盟の重要性を強調したという。産経は今回のイラク戦争を1990年のイラクによるクウェート侵略から始まった12年戦争ととらえ、米国の決断は独裁者を排除するためには、やむを得ないと論じたという。

⑧4/22コラム正論 平和と戦争の二分法を排す

朝日新聞の瀬戸内寂聴の反戦論が事前に紙面作成者と打ち合わせた談話であることは明白である。戦争を論ずるメディアに求めることは歴史への参画である。そのためには、三段論法を積み重ね、客観的に吟味し解明することだ。著者は戦後60年の日本の歴史記述は敗戦と新憲法によって植えつけられた戦争と平和の二分法によって拘束されているとし、メディアには、その呪縛から解放されることが求められる、と述べている。

月日	種類	タイトル／見出し	執筆者	面積c㎡	掲載面
4/10	コ	古森義久の眼／「記者の死」個人の判断…リスク覚悟／(特別編集委員)	古森義久	272	総合
4/12	コ	古森義久の眼／予測ミスの“戦犯”追及／(特別編集委員)	古森義久	287	総合
	コ：主張	報道のあり方を問われた／イラク戦争(ヨコ) (主張2/1)		196	総合 p 2
4/14	コ：産経抄	(見出しナシ)		147	1面
	コ：	古森義久の眼／CNNが隠したニュース／(特別編集委員)	古森義久	314	総合 p 6
4/18	特	社説検証／イラク戦争：朝日・毎日武力行使反対で終始一貫(ヨコ) ・朝日新聞[米国一強時代]国連など新たな難題／理は仏独にある／イラク戦争に反対する／国連を破綻させるな／この戦争を憂える／宗教戦争にするな／これが本当の同盟か／過信が招いた誤算／破壊の跡になにを築くか ・毎日新聞/日本は国際社会に対する責務果せ(ヨコ)／米英はさらに外交努力つくせ／見切り開戦は支持できない／一刻も早く破壊の終わりを／人類に戦争は不可避なのか／復興と平和の回復を急げ 読売・産経 日米同盟踏まえ米兵支持(ヨコ) ・読売新聞/「北の脅威」には米国との同盟が大事(ヨコ)／小泉首相の決断を支持する／イラク戦争の早期終結を望む／自衛隊の活用に異議がある／正しかった米英の歴史的決断 ・産経新聞/国連幻想から新たな国際協調体制／安易な反戦は偽善となる／独裁者の高笑い許すな／妥当な独裁排除の決断／12年戦争終焉の始まり／誤爆の犠牲と戦争の本質／国連幻想から覚醒のとき／独仏の豹変が教えるもの／十二戦争の終結に価値 ・解説(囲み)「同盟か」・論調真二つ二つ「国連か」(ヨコ) (p 10～p 11の広告を除く全紙面を使った特集)	産経新聞 論説委員 室 石川水穂 (論説委員)	2620 ○2枚 計170 ／各 紙の 社説 一覧 表計 4	特集
	コ	古森義久の眼／イラク戦争／中東の反米感情あおる／CNNの偏向報道	古森義久	294	国際
4/22	コラム：正論	イラク戦争／平和と戦争の二分法を排す／歴史をつづるマスメディアの役割(ヨコ)／メディアの見識を問う／歴史参画への厳粛な営み／多様な選択肢からの選択／日本学術会議会員／慶応大学名誉教授／神谷不二	神谷不二	395 ○43	オピ ニ オン
4/24	コ：	産経抄(見出しナシ)		147	1面

FCTフォーラム記録

『スキヤニング・テレビジョン日本版』を使って学ぶメディア・リテラシー

2003年3月29日 於：横浜

3月29日、横浜市のボランティアセンターを会場に、完成したばかりのビデオパッケージ『スキヤニング・テレビジョン日本版』を使い、FCTフォーラムを開催した。教育、地方行政、NPO、メディアから、また学生もふくめ37名（FCT会員16名、非会員20名、ゲスト1名）が全国各地から参加した。前半では、鈴木みどりFCT代表が『スキヤニング・テレビジョン日本版』について説明。後半に、実際にビデオ・テキストを用いたワークショップを行った。

●『スキヤニング・テレビジョン』とは

『スキヤニング・テレビジョン』はメディア・リテラシーを学ぶ教材として1997年、カナダで制作され、「メディア教育を根本的に変える斬新な内容」と世界的な評価を得ている。ビデオ・テキストとティーチング・ガイドがセットになっている。作品を手にした時から、日本版を制作したいと念願してきた。

幸運にも昨年、FCT25周年記念フォーラムにカナダから招いたジョン・ブンジャンテ氏がこのビデオパッケージの監修者であり、快く協力してくださることになった。

日本版の制作では、日本とはほぼ同時期にカナダで完成した『スキヤニング・テレビジョンII』と前作の『スキヤニング・テレビジョンI』の両者から、日本のメディア環境に適した18本を厳選した。このようなビデオパッケージの制作には一般に高額な費用がかかる。それにもかかわらず、こうして実現できたのは、制作会社イメージ・サイエンスによるメディア・リテラシーへの理解と協力のおかげである。

●日本版制作にあたって

イメージ・サイエンス社 大須賀 武

これまでFCT会員としてガゼットを購読してきたが、昨年始めて、ブンジャンテ氏のフォーラムに参加した。『スキヤニング・テレビジョン』は内容がバラエティに富んでいる。見る人の立場に立つと、作られた映像も違って見えることを実感した。作り手にも非常に有効だ。昨年の10月から約半年をかけ、英語版以上に理解しやすい内容にしようという意気込みで取り組んできた。原版の内容を変えずに、適切な日本語に吹き替える作業は大変だった。9人の声優が5時間をかけ、原版に近いニュアンスを出すようにした。日本では、メディア・リテラシーは未だ一部にしか認知されていない。今後、メディア教育のツールとして役に立つことを期待したい。

●マイケル・ムーアの作品など、全体の内容

『スキヤニング・テレビジョン日本版』の翻訳担当者たちが各ビデオ・テキストの特徴を説明した後、6番目の「恐るべき真実：アフリカ系アメリカ人の財布交換プロジェクト」が鈴木代表から紹介された。今年の3月、アカデミー賞を受賞したマイケル・ムーアによる短編ドキュメンタリーである。アメリカの銃社会を痛烈に風刺してはいるが、ムーア独特のジョークを楽しみながら、社会の理不尽な差別問題を考えるテキストになっている。

「日本のテレビと比較しながら、人種問題や笑いとは何かを考えるにも格好の教材」と鈴木代表は話す。参加者は、「白人の警官」

「犯人視されるアフリカ系アメリカ人」のステレオタイプなイメージやムーアの演出の意図などについて多様な意見を交換した。

後半はビデオ・テキスト17「アルジャジーラ」を使ってワークショップ。このテキストは元々カナダのシティTVが制作し、人気番組の「メディアテレビジョン」で放映されたもの。「メディアテレビジョン」は世界で起きているメディアの最前線取材し、斬新なテレビのあり方を追求する質の高い番組である。アルジャジーラ、中東諸国、イスラム世界の女性のイメージや欧米メディアとの報道の違いについて議論が沸騰した。

最後に、ワークショップの実践においてファシリテーターは事前にテーマの歴史的・社会的な背景を把握し、テキストの文脈に沿って授業を組み立てる必要があることを再確認して終了した。

FCTフォーラムに参加して

岡本能里子（東京国際大学国際関係学部）

私は現在国際報道学科に所属しており、昨年夏の研修は、後期の授業に早速活かすことができた。そこで今回もビデオパッケージと共に具体的な教え方も学べるということで早速申し込んだ。

日本語版は、カナダで作成された計91編のビデオ・テキストの中から18編が選ばれている。前半は、その選択理由の説明と翻訳に携わった方々の苦労話とコメントがあった。後半はビデオを視聴し、ティーチング・ガイドに従ってグループで議論するワークショップ形式に移った。選ばれたテキストは、今回アカデミー賞を受賞したばかりのマイケル・ムーアが米国の人種差別をコミカルに扱った作品と西側の統制から独立しアラブの視点からアフガン空爆やイラク戦争を報道し続けてきた

テレビ局アルジャジーラを紹介した作品で正にメディアの最前線を語るものであった。ティーチング・ガイドでは、8つの基本概念とそれをもとにした各テキストの分析方法が提示されている。これに沿ってワークショップが行われたため、今回も早速授業で実践することにした。以下に一部であるが報告する。

まず、昨年ビデオがあったら使いたいと感じた「スパゲティー・ストーリー」を視聴した。昨年後期に最初に述べた授業を履修した現在2年生の学生たちの為の授業である。「メディアはすべて構成されたものである」という概念を理解できたと自負していたのに、全員これを本物だと信用してしまい、この衝撃が更なる学習への動機づけとなったようだ。現在マイケル・ムーアの作品に移っているが、難点は、このテキストを読み解く鍵となる米国での差別の現状や各所に散りばめられた聖書、ピストル等の表象に込められた意味が、学生たちはもとより教師自身にも不足している点であろう。メディア・リテラシー育成をめざす者同士が連携して日本製のビデオ作品を製作する事が望まれる。日本製の作品を創る意欲を学生達に育めるような実践を地道に行っていきたい。

竹内 修司（文教大学情報学部）

出版界に長年身を置いた後に、今の学生たちと接する立場になって驚いたのは、彼らの活字に触れる度合いの少なさでした。しかし情報に対する感度はバカに鋭い。生まれた時からTVを見続け、物心ついた頃にはインターネットが存在していた世代には敵わない。彼らは「メディアリテラシー」の概念など、たちどころに理解します。理解はするけれど、それを日々のメディア情報の具体例にあててみる、いわば「物指し」がなかなか見つからなかった。ですから「スキャンニングTV」

には飛び付く思いでした。こんなに好適な教材はない。我国の実情とは多少異なる処もありますから、一日も早く日本の映像素材を用いた純正日本版を、どなたかに作って戴きたいものです。

あのパッケージの中で、私の最も愛する「スパゲッティストーリー」を、三十人ほどの学生に見せて作文を書いてもらいました。何人かは、BBCの番組、と聞いただけでエープリルフールに思い当たったようです。「作られた映像はさておき、パスタを食べている映像はまさに”その日収穫のパスタを食べている”としか見えなかった。これは主にナレーションの力が大きい。言葉によって現実とは別の世界が作られてしまっていたのである」という慧眼派。「もう手遅れかもしれない。私達が日常的に見ているものが、実は巧みに作られているものかも知れないではないか」と書いた正統派。

敵もさるもの、悪乗りして「私の祖父も昔スパゲッティを栽培していた。母の話によると、スパゲッティの木から下がるスパゲッティのように一本気な性格だったそうだ」とか「日本の栽培法は欧州とは異なる。イタリアから輸入された種をジョン・F・ウドンスキーが改良して、うどんが生まれた」などとヨタを飛ばす豪の者。中には「本場ものは木に成るのか」と真に受けたカワイイ学生も二人ほどいました。

井上史子(山口大学大学院教育学研究科2年)

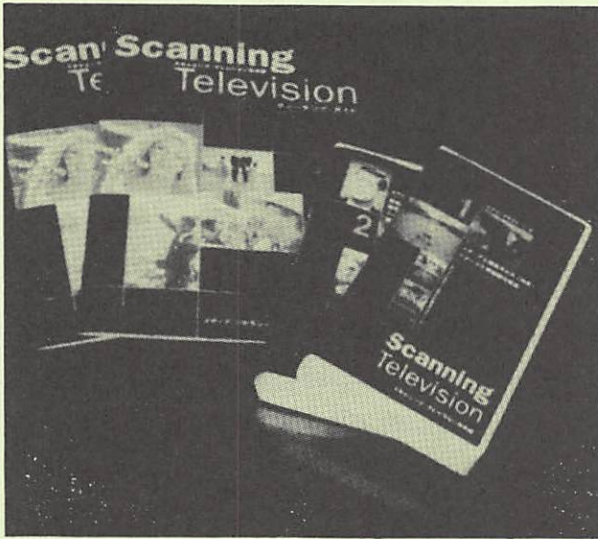
FCT市民のメディア・フォーラム主催のワークショップに参加させていただくのはこれが2回目です。今回は、昨年江の島で行われた「第3回メディア・リテラシー・ファッション研修セミナー+25周年記念国際フォー

ラム」への参加でしたが、鈴木みどり先生をはじめ多くの素晴らしい先生方のワークショップは大変有意義でした。また、その際に使用された教材の豊富さには目を見張るものがあり、特に映像教材は興味深いものが多くありました。そのFCTでメディア・リテラシーのためのビデオ教材が制作されたことをお聞きし、私は期待を持って今回のワークショップに参加したのですが、実際この『スキニング・テレビジョン日本版』ビデオには、日本人の発想では制作されえなかったであろうと思われる映像素材が多岐にわたって収録されているように思います。実は、私は本ワークショップ終了後、第1巻にある『バットマン：マスク・オブ・ファンタズム』を使って実際に小学生の子どもを対象としたメディア・リテラシーの授業を実施してみました。日本のアニメーションとは異なった画像に多少のとまどいはありましたが、ビデオ視聴後、子どもたちは映像に登場する人物のキャラクターや状況設定について熱心に話し合っていました。国や文化は違っても映像が伝えるメッセージは確実に子どもたちに届いていたのではないのでしょうか。今後は学校現場だけでなく、一般市民を対象としたワークショップでも本ビデオを活用したいと考えていますが、幸いなことに今秋、山口市に「山口情報芸術センター」が開館します。本センターは市立図書館と芸術・情報発信の場とを併設することにより、市民に様々な文化や情報に接する機会を提供することをコンセプトとしたものです。私はセンターの企画に携わる一員として本ビデオを広く紹介するとともに、山口におけるメディア・リテラシーの発展にも貢献していければと考えています。

●『スキヤニング・テレビジョン日本版』内容紹介

『スキヤニング・テレビジョン日本版』

—メディア・リテラシーを学ぶためのビデオパッケージ 2003. 4. 完成—



ビデオ・テキストとティーチング・ガイドがセットになった日本初の本格的なビデオパッケージ。カナダで制作され数多くの賞に輝いている『スキヤニング・テレビジョン』IとIIから日本のメディア環境に即して厳選したテキスト18篇を収録し、日本語で提供する。原作はメディア・リテラシーの第一人者、ジョン・ブンジャンテとメディア教師ニール・アンダーセン、CHUMTVのサラ・クロフォードのパートナーシップで制作され、公教育の場で広く使われている。

ティーチング・ガイドでは、まず、ビデオの内容を短く説明しながら問題を提起する「導入」部分があり、次いで、「見る前に」、「見ながら考える」、「見た後で」の3段階にわけて多角的に分析し、考え、討論し、対話するという一連のメディア

・リテラシー活動を提案している。メディアについて楽しく学びながら創造性を育むことができる。中学・高校の「総合的な学習の時間」や「情報」の授業はもちろん各地で開かれている生涯学習講座の教材としても最適。日本版の制作でも、鈴木みどりを監修者に、立命館大学社会学研究科大学院生（翻訳）、FCT市民のメディア・フォーラ（翻訳・頒布）、株式会社イメージサイエンス（制作・販売）、という教師・研究者、市民、メディア専門家の3者によるパートナーシップが構築された。

〔メディアと構成された「現実」〕

1. スーパーモデルがやきもちをやくと…

スーパーモデルを起用したクルマのCMと、それに関して立場を異にする3者（広告制作会社、イギリスの独立テレビ規律機関、性差別的な表現に反対する女性市民グループ）へのインタビューを交え、映像言語、女性表現のあり方、広告コード、について考える。

2. バットマン：マスク・オブ・ファンタズム

アニメ映画『バットマン：マスク・オブ・ファンタズム』のなかの2つのシークエンスを使って、カメラのアングルやサイズ、人物の行動などから、アニメ暴力のリプレゼンテーション、性役割、ヒロイズムを分析する。

3. 得意なものは何？

それぞれに自分の得意なものを披露する男子

たちが登場し、「誰もが何かしら得意なものを持っている」と語りかけるPSA（パブリック・サービス・アナウンスメント：公共広告）。

4. 私たちは女の子

多様な女の子が登場し、ステレオタイプにとられることなく、自分らしくあることを主張するPSA。

ビデオ・テキスト3と4を組み合わせ、メディアの価値観に影響されやすい子どもたちが一人ひとりかけがえのない自分自身について考える。

5. 人種差別をやめよう！PSA

カナダの子ども・若い人たちが人種差別反対をテーマに制作した10本のPSAを比較しながら、映像メディアの様式や技法を学び、人種差別反対のメッセージがどう表現されているかを分析する。

6. 恐るべき真実：アフリカ系アメリカ人の財布交換プロジェクト

マイケル・ムーア制作。アフリカ系アメリカ人の持っていた財布を警官が銃と見間違えて起こった射殺事件に対する風刺的なドキュメンタリー。人種の偏見・差別やそれらを題材にした風刺や笑いの意味を考える。

【イメージと価値観の販売】

7. グラウンド・ゼロの広告

グラウンド・ゼロは斬新で魅力的な広告をつくることで話題になることの多い広告代理店である。そこで制作されたCMの分析をもとに、クリエイティブな広告の制作プロセスについて、また、イメージや価値観を販売する広告について考える。

8. コカコーラ化された世界

コカコーラ社はコカコーラの認知度を高めるためにさまざまなマーケティング手法を使ってきた。コカコーラのロゴやCMが伝えるメッセージ、CMソングなどから、コカコーラと私たちの関係を考察する。

9. カルチャー・ジャマー

カルチャー・ジャマーとは、主流メディアのエネルギに対抗するようなメッセージを創り出す人たちである。彼らの活動を通して、商業化された生活とメディア、企業、社会的アクティビズムについて学ぶ。

【環境化するメディア】

10. スパゲッティ・ストーリー

英BBCは1957年のエイプリルフールの日に、木に育つスパゲッティの大豊作とその収穫風景を放送した。ドキュメンタリーという様式の信頼性について、映像、音楽、ナレーションなどから分析する。

11. 歴史を利用する広告主

キング牧師の有名な演説「私には夢がある」に基づいた仏アルカテル社のCMを取り上げ、公民権運動のシンボルであるオリジナルの演説がもつ歴史的な文脈を、どのようにして作り変え販売戦略に利用しているかを分析する。

12. ポップ！商品コネクション

スポンサー企業はミュージシャンを使ってどのよ

うに子どもたちに語りかけているのか。ミュージシャン、企業、ファンへのインタビューを通して、ポップカルチャーと商品の販売促進との関係を考える。

【地球市民】

13. ケネディとニクソンの討論

1959年のケネディとニクソンの大統領選テレビ討論会を取りあげ、政治キャンペーンを論争を基盤とするものからイメージ中心へと変容させたと言われる映像を検証。外見、態度、目線などによる影響を分析する。

14. ケネディ暗殺：ザップルーダーの8mmフィルム

ザップルーダーがケネディ大統領の暗殺現場を撮影した無声映画。このフィルムが辿った歴史を踏まえて映像を分析し、暗殺事件をめぐる科学的、法的証拠として利用されたこと、さらに著作権の問題などについて考える。

15. 9.11：メディア報道の報道

このドキュメンタリーでは、2001年9月11日の事件発生直後からニューヨークで取材し、報道していたニュース制作者にカメラが向けられている。危機的状況にあるときの報道メディアの役割を問う。

16. メディア、戦争、検閲

カナダの各局報道関係者へのインタビューを通して、アメリカ政府による対テロ戦争のニュース報道規制の動きとメディア報道のあり方を考える。メディアは政府による情報差し止めの要請を尊重すべきか、それとも視聴者に情報を伝える責任があるか。

17. アルジャジーラ・テレビ

カタールを本拠地とし、西側の統制から独立したアルジャジーラ・テレビの報道スタンスや視点を検証する。欧米メディアと比較しながら、ニュースとは何かという根本的な問題も考える。

【ニューテクノロジー】

18. インターネット

インターネットは自由な社会に民主主義をもたらすのか、それとも企業が潜在的な消費者をターゲットにするための便利な道具になるのか、識者や業界関係者のインタビューを10年にわたってふりかえり、問いかける。

子どもの権利とジャーナリストの責任

～ジャーナリストとメディア専門家のためのガイドライン～

国際ジャーナリスト連盟 (International Federation of Journalists) 2002年1月

国際ジャーナリスト連盟(略称IFJ, 本部ベルギー)は世界104カ国50万人のジャーナリストが加盟する組織である。表現の自由、子どもの権利の問題などに取り組み、取材指針の発行にも積極的である。IFJが昨年発行した子どもの取材に関するガイドライン Putting Children in the Right - Guidelines for Journalists and Media Professionals, (全72頁)は、子どもの立場にたって書かれ、子どもにいかにか配慮すべきかを具体的に示している点で、画期的である。以下に、その内容を抜粋し要旨をまとめた。

* * *

子どもの権利に対する意識を高め、促進させることはメディアに対する挑戦である。メディアは、子どもを公平、忠実かつ正確に報道するだけでなく、子ども自身による多様で創造性にみちた意見を扱う場所も確保しなければならない。全てのメディア・プロフェッショナル(専門家)とメディア組織は、ニュース、時事問題、そしてクリエイティブなパフォーマンス・アーツに関する報道において、子どもの権利を自覚し、それを報道に反映させる責任がある。

ジャーナリストは子どもの虐待事件を公表し、子どもの権利に対する社会的意識を高める一方で、メディアに子どもを露出させ、虐待者にもさらしている。それがポルノグラフィや売春に対する寛容な態度を浸透させ、またその手段を(たとえば広告などで)提供してしまう。ニュースメディアは虐待の被害者と加害者を報道、写真、ドキュメンタリー、ドラマなどを通じて社会に知らせる一面を持つ。しかしその一方でニュースや広告において性的に挑発的なイメージをつくり、最悪なことには、子どものポルノグラフィの伝達手段や小児性愛者ネットワークの情報源にもなり得るのである。すなわち、メディア自身が子どもを搾取する立場になることもある。メディア編集者の中

には、センセーショナルリズムは、深刻な社会問題に対する読者や視聴者の注意を喚起する、という主張もみられる。しかしながら、ニュース報道の内容は、子どもの虐待に関する社会的、経済的な要因—たとえばコミュニティや家族の中の混乱、ホームレス、悪徳雇用者、売春斡旋者、麻薬問題、貧しい親が家族を支える為に子どもを売らなければならない理由—などを分析することはめったにない。子どもに関するポジティブな報道や、子どもの生活と権利については十分に伝えられてはいないのである。

この問題をどのように改善することができるかを検討するためには、メディアの業務、制度、ジャーナリストが守るべき規則やガイドライン、望ましいジャーナリズムの障害となるもの、を調査する必要がある。

子どもの権利について十分に報道することは、子どもに関する膨大な情報収集を必要とする。しかし、その多くは国の権力者が保持している。教育、健康、雇用、開発、社会状況に関する情報が一般に入手可能なものでなければ、メディアが有意義な報道をすることはできない。秘密主義で情報提供に消極的な国家や機関が多すぎるのである。また、子どもの搾取に関する多くの事例は、情報提供者の匿名性が完全に保護されない限り、子どもを危険にさらすことになる。したがって、明るみに出すことはできない。

表現の自由という権利は、メディア専門家にとって常に重要であるが、他の重要な権利ともバランスがとれていなければならない。特に、恐怖や搾取から自由になるという子どもの権利とのバランスが重要である。IFJのためにイギリスのPresswiseが行った研究では、ジャーナリストが所属する組織のうち、子どもの権利を保障する実践の基準をもつ組織はほとんどないことが明らかになった。

IFJは1998年5月に、70カ国のジャーナリストが参加した会議で、子どもの権利に関する報道のガイドラインを初めて作成した。このガイドラインに関する議論は、ラテンアメリカ、アフリカ、アジアの各地域で行われ、2001年にソウルで開催されたIFJの年次総会で正式に採択された。このガイドラインは2001年12月に横浜で開催された第2回「子どもの商業的搾取に関する世界会議」において発表されている。ガイドラインの目標は子どもに関連する事象の報道においてジャーナリズムの基準を向上させ、子どもの権利を促進し、子ども自身の発言を取り上げるようメディアに働きかけることである。

商業主義における熾烈な競争は、メディアが子どもを搾取するに至る一つの要因である。感情やセンセーショナルリズムによる子どもの露出は視聴者をひきつけ、ニュースの価値を高める。しかし、情報入手にあたってジャーナリストは、公平性、公開性、誠実な手段を意識していなければならない。特に子どものニーズをふまえた場合、常に倫理的である必要がある。

広告は、子どもに訴えるとき、法律と自主的な規律を組み合わせ、それに従う。広告産業は、子どもの扱いに関する申し立てに敏感だからである。イメージづくりが売上の強い原動力になるような産業で、それがどのように解釈され導入されるのか？さらに、グローバル・コミュニケーションの時代に、一つの国で作成されたメディア素材が、文化的価値や期待が異なる別の地域で放送されるかもしれないのである。インターネットをはじめとする新しいコミュニケーション・メディアは、虐待の対象として子どもを狙う手段として、特にサイト上でのポルノグラフィとして、あるいは、子どもを誘惑する手段として、また子どもに関する情報を共有する場として、世界中で強い関心の的となっている。国際的な組織は、メディアや学校を通してより多くの情報を子どもが入手できるように、呼びかけている。子どもは、さまざまな情報が提供されることにより、性的搾取の危険やリスクから、自分を守ることができるようにな

るからである。小学生以上の子どもは、番組や広告から受けるメッセージの読み解きを促進するメディア・リテラシー教育を受け、クリティカルでかつ情報に精通したメディアの使用家とならなければならない。

このガイドラインは、子どもとその権利について、メディアとジャーナリストをより敏感にし、メディアの議論をより活発にするための多くの実践を推奨している。これによりジャーナリストは子どもの尊厳を保ち、搾取や虐待を避けるような表現をすることが可能になる。

●なぜガイドラインが必要か

ジャーナリストは、誰を取材・撮影し、記録するか、収集した情報をどのように原稿や番組として形にするかという意思決定を行うなど、高度な自主性をもって働くことが期待されている。このガイドラインの目的は、ジャーナリストによる仕事の進め方を変えることである。よいガイドラインとは、すべきこと、すべきでないことをただ示すものであってはならず、倫理的課題を通じて考えるための枠組みとなるものである。また、子どもの権利が守られるためには、正確な協定がなければならない。このガイドラインは、ジャーナリストが子どもの問題や子どもの考えを真摯に取り上げようとしていることを子どもに示すものとなる。さらに、ジャーナリスト、フォト・ジャーナリスト、テレビカメラマン、その他のメディア関係者が、子どもの権利を侵害しないことが保証されなければならない。多くの大人は、自分が取材される場合には、十分な情報を得ることでメディアにどのような取材をしてほしいかを判断することができる。しかし、子どもや若い人は、そのような判断をするほどの知識も経験も持っていない。ジャーナリスト、カメラマン、番組制作者と子どもの間には公平性がなく、権力の不平等が存在するところに、搾取の可能性が潜んでいる。このガイドラインを真剣に意識するジャーナリストは、子どもを守り、また自分自身をも守ることになる。

●子どもの人権とは

国連「子どもの権利条約」は、1990年に発効し、

2002年にはアメリカ合衆国とソマリアを除く全ての国が批准し、アメリカも批准の意向を表明した。国連事務総長コフィー・アナン氏は国連人権条約50周年に際し、「人権は人類の存在と協調の礎」と発言した。「子どもの権利条約」は、子どもが大人と同じ権利を持つことを強調するものであるが、実際には、多くの子どもが条約に含まれる権利を実現できていない。それは子どものもつパワーが不十分であり、実際に子どもの権利は、大人によってもたらされるという前提があるからだ。この条約において最も重要な権利とは、子ども自身が意見を持ち、それを表現することができることである。第13条は、表現の自由とメディアへのアクセスを保証している。そして批准国は子どものプライバシーを守り、中傷や侮辱から保護するような法律の制定を求められている。第17条では、マスメディアに対する子どものアクセスを保証し、多様な情報源から、特に社会的、精神的、倫理的な子どもの幸福・健康を促進させるような情報へのアクセスが保証されなければならないと記述されている。

また、第19条において子どもの権利条約は搾取や性的虐待から子どもを守ることを示している。さらに「子どもの権利条約」にその後付加された基準として、18歳未満の子どもが軍事活動への従事を強要されることを禁じている。2002年からは、子どもの売買、売春、ポルノグラフィに関する記述も加わった。メディアは第10条によって、子どもの搾取の問題を取り上げる際には、その原因である貧困、開発などの背景を探るための国際協力が得られるよう支援される。これにより、売買、売春、ポルノグラフィに利用される子どもの問題に取り組むことができる。子どもの権利条約と、その付加基準には批准国の状況を評価するシステムがあり、ジャーナリストは自国の人権状況について調査することが可能である。各国は10年ごとに、国連の子どもの権利事務局にレポート提出を義務付けられているからである。

「子どもの権利条約」は、子どもを18歳未満と定義しているが、世界各国で婚姻、投票、軍事活

動への参加を含む成人の権利については、それとは異なる多様な年齢基準が存在している。10歳までの子どもは、食事、居住等、生活のすべてを大人に依存している。10歳未満の子どもは、例えば自分が取材・撮影されることについて知識をもった判断ができない。さらに、10歳を過ぎて成長するにつれ、貧困、過酷な労働、早期の性交渉、麻薬、アルコール、事故、暴力等の経験により、子どもの夢が壊される。WHOの調査によると、毎日新たに7000人の若い人がエイズに感染しているといわれる。ジャーナリストは他の大人と同様、若い人を尊重し、若い人が表現し、その意見や経験が活用され、評価される機会を提供すべきである。

メディアの子どもへの影響は特にテレビの音楽番組、ファッションやドラマにおいて最も強く、子どもはその内容からファッションや話し方、行動などを取り入れている。しかし、若い人が取材されるときに不満として、若者の犯罪や大人が仰天するような行動を撮影するためにカメラの前で演技させられることが指摘されている。メディアやジャーナリストは、子どもが倫理的にかつ適切な形で取材されるための責任を負わなければならない。

●子どもはどう悪用され、搾取されるのか

「子どもの権利条約」が世界中で成果を生み出しているなら、子どもは安全かつ協力的な環境に育つことができる。しかしながら、現状では全ての子どもがそのような環境を享受しているわけではない。その実態は5歳未満の子どもの死亡率統計に表れている。多くの子どもは、小さな頃から労働に従事させられており教育を受けたり遊んだりすることができない。特に少女は教育を受ける機会を奪われやすい。ジャーナリストはこのような社会問題を詳しく調査するべきである。多くのコミュニティにおいて、子どもは肉体的、性的に虐待されているものの、その実態は隠され否定されることが多い。性的虐待のうちの多くは子どもの知人などにより家庭内で起こる。このような実態はすべての社会で生じているのである。裕福な

西側諸国でも貧しい発展途上国においても、子どもの性的虐待の調査結果は、実際よりも過少に推計され、報告されている。

子どもが危険にさらされるのは、大人が形成する社会に何らかの問題があるからである。子どもの権利について報道する場合、子どもの属するコミュニティや、そのコミュニティにおける子どもの位置付けに関する調査を無視することはできない。銃社会に暮らす若い人が武装したギャングになるのはどんなプレッシャーによるものか？なぜ女の子は男の子よりも教育の機会を奪われやすいのか？母親が投獄されたら子どもはどうなってしまふのか？子どもに物乞いをさせなければならない母親の苦悩とは？なぜ自分の子どもを愛しているのに、親は暴力をふるってしまうのか？

●子どもが直面する多数の危険

- ・子どもは貧しいコミュニティにおいて、両親の共働きによる育児放棄の犠牲になる。
- ・子どもは家族を養うため、または商業的な搾取によって、長時間労働を余儀なくされる。
- ・少女は様々な場において差別されやすい。
- ・子どもは、戦争、干ばつ、自然災害によって難民化し、自分が起こしていない戦争の犠牲になる。
- ・世界各都市にホームレスの子どもやストリートチルドレンが存在する。
- ・閉鎖された施設にいる子どもは、虐待のリスクがより高い。
- ・身体に障害をもつ子どもは、社会に認められにくく、権利を失う可能性がある。
- ・違法滞在の子どもは性産業での売買などを通じ、さらなる危険にさらされやすい。

子どもがより弱い立場に置かれるようになったのは、HIV/AIDSの感染拡大によってである。AIDSに関する根拠の無い噂によって、子どもが犠牲になっている。その一つは処女との性行為がHIVウィルスを消去させること。そのような噂は若い少女をレイプの犠牲にし、南アフリカでは乳児のレイプというもっとも恐るべき結果を招いた。さらにもう一つは、より若い人との性交渉のほうがHIVに感染しにくいという噂もあ

る。それは、無情にも性産業へより多くの若い女性を流入させることとなった。

●虐待報道におけるメディアの役割

メディアは子どもの権利と虐待の問題を報道するという重大な役割をもつが、ジャーナリストにとってみれば虐待の背景事情を取材することよりも、単にセンセーショナルな表現をすることのほうが簡単である。しかしながら報道にあたって焦点とすべきは、子どもの権利であって、視聴率や販売部数であってはならない。

●子どもの虐待と搾取に関する最近の問題

子どもの虐待と搾取に関しては、児童労働、ストリートチルドレン、性的搾取と売買が挙げられる。

ストリートチルドレンは、暴力、病気、搾取の危険にさらされている。多くの都市ではストリートチルドレンを支援するための特別なプログラムを実施するNGOがこの問題を取材しようとするジャーナリストの助けとなるだろう。

ユニセフは、途上国、先進国の双方で毎年新たに100万人の子どもが性産業に従事し始めると推測している。貧しい国の子どもを虐待するため、性愛者のネットワークが子どもの権利を最もわいせつなかたちで侵害しつづけている。メディアがこれを報道することが、虐待防止や、犯罪者の取り締まりに貢献することになる。ジャーナリストは、事実を明らかにし説明するうえで、貴重な役割を担う。

ジャーナリストが行うことのうち最も重要なのは虐待されている子どもと対話し、その実情を伝えることである。インタビューは、子どもにさらなる搾取の恐怖や報復などの可能性がないように、安全な場所で行わなければならない。ジャーナリストは子どもに信頼され、子どもを支援した実績をもつNGOと協力し取材することが望ましい。セックス・ツーリズムは調査を必要とする問題であり、情報源の収集のための時間が必要である。またメディアは虐待の典型を紹介することで、子どもが見知らぬ人、または家族やその知人により虐待（または殺害）されることの危険を訴えなけ

ればならない。

横浜で開催された第2回「商業的・性的搾取に関する世界会議」では、子どもの商業的搾取は犯罪であり、子どもの犠牲者を有罪とすべきではないとされている。これはすなわち、買春に従事した子どもは起訴されるのではなく、社会復帰するということを意味する。

●性的虐待に関する報道—西アフリカの事例

西アフリカの国々では観光産業の増大に伴うジレンマを抱えている。豊富な自然や環境、野生生物、海岸、フレンドリーな人々、ホスピタリティーから、アフリカの一部地域はアメリカやヨーロッパからの観光客にとって魅力的な地になりつつある。しかし、観光産業が西アフリカで発展すると併せて、性産業のネットワークや子どもの性的搾取も増加することになる。そしてこのことが西アフリカの報道関係者の問題となる。報道関係者は、性をタブー視するような西アフリカ地域において、性についての十分な記事をどのように書けばよいのだろうか。娘や息子の違法な肉体関係、性産業から経済的報酬を受ける家族についてジャーナリストが報道すれば、間違いなく身の危険にさらされることになる。ガーナのDispatch紙の編集者Ben Ephsonは、そんな記事を扱ったことで、子どもの性産業で利益を得ている人物から怒りを買ったと述べている。それ以外にも、The IndependentのレポーターであるEdwin Arthurは性的ネットワークを明らかにしたときに脅迫を受けた。

●メディア専門家へむけた意識化のためのトレーニング

Press Wise Trustは調査や子どもの権利に関するジャーナリスト向けの研修をアフリカ、アジア、中央および東ヨーロッパ、旧ソ連、ラテンアメリカでIFJとユニセフとの協力で行っている。Trustは意識化のトレーニングはより高度な倫理基準をもたらすことになると結論づけている。

メディアの専門家が子どもに関わる記事を書くときには、その方法を再考するようになる。ジャーナリストはより感受性をもって若い人に接し、そ

の声に耳を傾け、子どもの視点や意見のスペースを確保するようになる。研修がもたらした一つの成果は、ジャーナリストが、ステレオタイプや（若い人に対する）優越感のない表現の仕方を身に付けたことである。

意識化のためのトレーニングで重要なのは、子どもの声に焦点をあてることである。メディアの専門家は、どうすれば子どもが自分の生活について自由に意見を述べるような発言の機会を与えられるかを考えなければならない。研修においてNGOの協力が得られるならば、NGOを交えて子どもに取材することが実現し、子どももその行為がトレーニングに過ぎないことを十分に自覚できる。また秘密性の保持が尊重され、子どもが感じたことをフィードバックする（取材のこと、聞かれて嫌だったこと、取材や記事に関して好きなこと、嫌いなこと）など自由に発言することができる。

●組織やNGOとの連携

子どもの権利についての意識化はメディア専門家がキャンペーンの正当性を評価し、より合理的にNGOとともに活動するための助けとなる。ジャーナリストが商業的・性的搾取を根絶するための役割を担うならば、事実に基づく情報と実在の事例を知る必要がある。子どもとともに活動する人は、取材するメディアを信頼し、子どもを危険にさらさないようにしなければならない。NGOとの関係をより有効にするにはトレーニングにNGOを関与させることである。これにより双方で知識が共有され、それぞれの制約といった事情に対する理解が深まる。（The Press Wiseの提供するトレーニングの組み立ては、www.presswise.org.ukで入手可能である）

●子どもへのインタビュー、撮影について

子どもを取材する場合にも、大人の場合と同様の基準を適用しなければならない。まず、子どもは尊重され、個人として扱わなければならない。

子どもの権利保護に従事する人の中には、子どもの同意なしに撮影すべきではないと主張する人もいる。それが忠実に守られるならば自発的な子

どもの集団はほとんど撮影されないことになり、難民や、ストリートチルドレンや、遊んでいる子どもですらほとんどメディアに登場しないことになる。このような写真は多くの場合、距離をおいて撮影されている。しかし、子どもをテレビや新聞に登場させないことが、その権利を保護することになるとは必ずしもいえない。

急速に進行する事態に直面したとき、ジャーナリストは即時に対応しなければならず、許可を得ずに取材をする場合がある。例えばベトナム戦争時に撮影された、路上を逃げ走る泣き顔の少女の写真で有名になった9歳のKim Phucの権利は、その撮影時において侵害された。しかし、彼女は、その後、化学物質が米軍により投下されてからより深刻な虐待に悩まされることとなった。ちいさな侵害が、その後の大きな虐待（化学物質汚染）の可能性を示唆し警鐘をならすという意味で正当化されることもある。

写真は2つのストーリーを伝える。ひとつはレンズの前にある対象を、もう一つはレンズの手前の撮影者である。写真家と撮影される対象の間には、そのイメージがどちらの所有にあたるかという緊張関係が生じている。子どもに関しては特に配慮が必要である。子どもには、パパラッチのような無神経な取材を受ける義務はない。子どもを取材するジャーナリストは、記事として書く内容が出版されたり放送されたりするという子どもに理解させておく必要がある。また、インタビューはかならず、取材者以外の大人のつきそいのもとで行われるべきである。

【子どもの報道におけるガイドライン】

●序文

ジャーナリストとメディアによる日々の挑戦は、子どもとその権利の報道の仕方に現れる。子どもの人権が国際法で定義されたのは最近のことであるが、国連の「子どもの権利条約」はすでに幅広く支持されており、人間に関するもっとも普遍的な法理であるといえる。メディアは、子どもの権利の侵害にかかわる問題、子どもの安全、ブライ

バシー、教育、健康、社会福祉、子どもの搾取を調査する必要性、また、それらが社会的に重要な問題であることに注目しなければならない。

●ガイドライン

ジャーナリストとメディアは、子どもに関わる問題の報道において可能な限り厳格な倫理的基準を維持することに努める。特に、

1. 子どもを含む問題の報道において正確かつ繊細な、卓越した基準づくりに努力する。
2. 番組や出版物で子どもに悪影響を与える情報を含む情報・画像を掲載しない。
3. 子どもに関する記事においてはステレオタイプやセンセーショナルな表現を避ける。
4. 子どもに関する記事の掲載結果を慎重に検討し、子どもへの影響を最小限とする。
5. 特に公共の関心事で無いかぎり視覚的表現あるいは子どもの特定を避ける。
6. 可能なかぎり子どもがメディアにアクセスし、誘導なしに意見が述べられるスペースを提供する。
7. 子どもが提供した情報を実証し、その実証が情報提供者である子どもを危険にさらさないよう十分に配慮する。
8. 子どもの性的表現を避ける。
9. 公平かつ率直で、開かれた方法によって写真を入手し、可能であれば子どもや責任のある大人、保護者からの承諾を得る。
10. 子どもの興味を代弁する組織について、その証明書を確認する。
11. 子どもの福祉に関する記事については、子どもにとって明らかに関心のある内容でない限り、子どもやその親、保護者に報酬を支払わない。

●子どもの権利を意識化するために

メディアの専門家は、子どもの権利に関する全ての情報を提供するよう役割を強化する方法を開発しなければならない。以下は、子どもの権利の重要性への意識を向上させるための推奨事項である。

1. ジャーナリストのトレーニングとメディア教育
 - a) 特に子どもに影響を与えるような報道基準や倫理的な問題はジャーナリストのトレーニング

において優先されるべきである。

b) 「子どもの権利条約」の概説資料やメディアの望ましい報道実例は、研修やマニュアルの基礎となる。

2. 専門的なジャーナリズムのための環境整備

a) 政府・行政はメディアや市民組織とともに、社会問題を取材できるよう、専門的なジャーナリズムのための法的・文化的な枠組みをつくる必要がある。

b) メディアの専門家には表現の自由が、虐待や恐怖からの自由という基本的人権とともに、尊重されなければならない。

c) 子どもの問題を扱う場合には、ジャーナリストやメディアのニーズが理解されるために、メディア、ジャーナリスト、番組制作者や関連組織間の対話を支援する必要がある。

d) 各国のNGOは、子どもの権利やその領域において信頼できる専門家のリストを作成し、メディアへの配布を検討すべきである。またそれがパソコンでアクセス可能であれば望ましい。

3. 管理基準と自主規律

a) 管理基準と報道のガイドラインは、報道の必要性を説明するうえで有効である。そのような基準は、ジャーナリストやNGO関係者が編集者、出版社、放送局とともに問題を取り上げる際の武器となる。

b) メディアの専門的組織は、IFJが採択したガイドラインのように子どもの権利に関する報道に特化した基準を、一般的な倫理基準と併用して、取り上げるべきである。

c) ジャーナリストや番組制作者は、子どもの人権侵害に関する社会的意識を向上させなければならない。しかし報道には十分な配慮が必要である。特に子どもの権利に関しては、可能な限り厳しい基準での専門的管理が不可欠である。

d) 子どもをとりまく噂話やステレオタイプ、特に発展途上国で発生したものに対しては、その真偽を確認し、または使用しない。例えば、発展途上国の親は子どもを尊重しない、少女は少年よりも劣っている、子どもが犯罪に巻き込ま

れるのは子ども自身に責任がある、児童労働やセックス・ツーリズムは子どもの貧困を緩和する、といったようなステレオタイプである。

e) ジャーナリストは弱い立場にある子どもを危険にさらすような詳細な情報を決して公開してはならない。子どもの尊厳を侵害するような情報の露出を防ぎ、個人の特定を避けたいうえで、子どもについての記事に報道価値をもたせなければならない。

4. ニュースルームにおける議論の必要性

a) 子どもの権利に関する報道と子どものメディア表現について建設的・協力的な議論が奨励されなければならない。そのような議論は、メディアの管理部門、編集部門、およびマーケティング部門の各セクション間で行われるべきである。

b) 編集者やメディアの管理者は、子どもにかんして偏向した、あるいはセンセーショナルな表現に対し明確に反対する政策を実行するとともに、ジャーナリスト、番組制作者による高度な倫理基準の適用を奨励しなければならない。

c) メディアは、子どもの生活すべてをカバーすることに責任を持つ“子ども特派員”の任命を検討すべきである。また子どもの視点を表現するため、子どもの成長と発達、子どもの虐待、危険要因、子どもの性に関する表現、法律、インタビューのテクニック、子どもとのコミュニケーション、などの内容を含む研修を実施すべきである。

d) 情報源や、コメンテーターとして、子どもがメディアにアクセスする新しい方法の開発をめざす。子どもは、自らが提供した情報や意見が保護されることを知る必要がある。

5. 子ども・メディア・コミュニティ

a) 小学生以上の子どもは、メディア・リテラシーのトレーニングを受ける。これは番組や広告のメッセージを理解し、クリティカルに読み解き、十分な情報をもったメディアの利用者となるためである。 (翻訳 関根里砂)

International Federation of Journalists

(<http://ifj.org>)

データバンク

【国内篇】

●なぜメディア研究か?経験・テキスト・他者、ロジャー・シルバーストーン著、吉見俊哉・伊藤守・土橋臣吾訳、せりか書房、2003年4月刊。

メディアは私たちの経験の中心をなしており、それを研究していかなければ、私たちは私たち自身の生を理解することができない。メディアは経験を伝達し、反映し、表現しているものであり、したがってその研究は、制度、生産物、技術としてのメディアだけではなく、むしろ媒介作用のプロセスとしてのメディアについて思考するものでなければならない。また重要な事件や危機などの例外的な事態とメディアとの関係より、メディアが最も重大な作用を及ぼす、自明化した日常的なレベルを出発点とせねばならない。

本書はこのような、なぜメディアを研究するのか、またどう研究していくべきかということについて、以下の5セクション16章でまとめられている。1～3章(経験のテクスチュア、媒介作用、テクノロジー)では上記の問題意識が述べられ、4～6章「テキストの要求と分析の戦略」ではメディアが人々に訴えかける方法として、レトリック、ポエティック、エロティックというメディアテキストのメカニズムを分析する。7～9章「経験の諸次元」(遊び、パフォーマンス、消費)はメディアのテキストやテクノロジーと私たちの活動との相互関係についての考察、10～12章「行為と経験のロケーション」(住居とホーム、コミュニティ、グローブ)では行為と媒介作用の相互関係について空間という観点から論じられる。13～16章「意味の構成」(信頼、記憶、他者、新しいメディアの政治学にむけて)では、日々の社会生活のなかで安全とアイデンティティを追求するための枠組みを用意するメディア能力について、「信頼」などの概念を用いて議論される。

最後に、日常生活におけるメディアの遍在性と

中心性が所与のものとなり、その役割が際立つ今、私たちすべてにとってメディア・リテラシーが重要であり、メディアを研究する者は、自分たちが学んだ事柄を伝えていかなければならないとの提起がなされる。そしてメディアや、メディアを研究する者には「世界とそこに生きる他者がヒューマンとなる」ための責任があるとされる。(T)

●検証!イラク戦争とテレビ、小田桐誠、「放送レポート」№183、2003年7月号。

2003年3月から4月の日本のテレビ局によるイラク報道の批判的検証。各テレビ局は、戦争が始まるとバクダットから撤退して、自局の記者には米英軍の従軍取材をさせた。砲弾が打ち込まれる側のバクダットでの取材は、フリージャーナリストや現地スタッフを起用した結果、新聞なら一面トップに当たる内容のニュースが、フリージャーナリストなどによる報告となった。

捕虜映像の扱いでは、遺体の映像を流さなかったNHKに対し、テレ朝はイラクのアルジャジーラが流した映像をそのまま放送した。フセイン像引き倒しの映像をめぐるでも、日テレ、テレ朝が「歓迎している市民は少数」と報道するなど、民放の方にアメリカの情報操作から距離を置こうとする姿勢が見られた。NHKは米軍の発表をそのまま流すなど、米国よりの報道が目立った。アジアプレス・インタナショナル代表野中章弘氏は、筆者のインタビューに答えて、「NHKは米政府のスポークスマン」、「視聴者に戦争の実装を十分伝えられなかったという反省が欠けている」と述べる。筆者は「既存のNHKや民放とは異なる、視聴者が出資し、フリーのジャーナリストたちが取材・報道する新しいしくみをもつテレビ局の出現なしに、現在の閉塞的な状況は打開できない」としめくくる。(E)

●ジェンダーというメガネーやさしい女性学一、諸橋泰樹、フェリス学院大学出版、2003年。

「男性なのになぜ女性学をやるのか」とよく聞かれるというマスコミ論、ジェンダー論の研究者

が、高校生から大学生くらいの若い読者のために書いた女性学入門書。語りかけるような親しみのある口調だが、筆者の基本的スタンスは、学問を通して「身もふたもなく事実をつきつけ、人々の保守的な観念や態度に不安や不快さを呼び起こし、覚醒させ、理性的にふるまうよう警告し」、「社会をより良い変化へと促す」ことにあり、そのための様々な「挑発」が仕掛けられている。

1章「ヒトは社会によって『人間化』される」では、『『本能』ときたら注意した方がいい』、「セックスだって『本能』とはいえない」と、日常よく耳にする言葉から問題を広げ、2章では「性はグラデーション」であるとして、多様なジェンダー・アイデンティティと社会的文化的な規範について触れる。3章以下では、学校や家庭がつくるジェンダー、働くことの意味についてなどが語られ、最終章「結婚にみる女性と男性の権力関係」では、離婚やDVなどの「『愛』という名の所有と束縛」のテーマが、統計や調査結果を交えて分析されている。(E)

●「テレビの個有時代」と子ども—中学生、保護者、教師、保育士への調査から—(レインボーレポートvol.7)、編集・発行 臨床教育研究所「虹」、2003年3月。

本書は、テレビが“一軒に一台”から“子ども部屋に一台”の「テレビの“個有”時代」へと変化した今日、子どもとテレビ生活の実態、問題点を、アンケート調査を基に明らかにしようとしたものである。調査対象は、中学生・保護者・教師・保育士。四者の意識は、以下のとおりである。

中学生は、「やらせ」などテレビへの不信感を抱きつつも、テレビを生活の必需品と考え、テレビ視聴の目的を「楽しむため」としている。

保護者は、“テレビは子どもに悪いもの”というイメージを抱き、生活習慣や健康面の乱れを懸念する一方で、テレビが友達同士や家族間のコミュニケーションツールの役割を果たしているなどテレビのプラス面の効果も自覚している。

教師は、子どもへのテレビのマイナス面の影響

を強く感じ、また、テレビのプラス面の影響を、知識や情報の獲得など、学習面の効果と結びつけて捉えている。

保育士は、子どもたちの成長、発達、人格形成などに対するテレビのマイナスの影響を心配し、また、「テレビ世代の第一期生」と呼ばれる幼児の親たちによる「テレビによる子守り」から生ずる親子関係の弱体化にも懸念を示している。

さらに、テレビ局への要求として、いじめ・言葉遣い・暴力・性的表現などの番組内容や、子どもへの配慮、夢や感動を与える番組、自然の豊かさや命の大切さを伝える番組、興味を与えたり、想像力を膨らませたり、教養を深めたりできる番組への要望を紹介している。(H)

●アホでマヌケなアメリカ白人、マイケル・ムーア、柏書房、2002年刊。

ジャーナリスト兼映画監督のアメリカ白人マイケル・ムーア氏が、アメリカ白人が牛耳るアメリカ社会をユーモアを持ちつつ厳しく批評した著作。アメリカの政治・軍事から、経済、教育、人種問題、性差別、環境問題など批評の領域も幅広い。

著者は、アメリカ社会の人種問題を痛烈に批評した章「白人どもを殺せ」の中で、毎晩テレビで何度も見せられているのは黒人が犯した犯罪のニュースであると書いている。「殺人、強姦、強盗、暴動、麻薬売買、売春…etc.「容疑者は黒人の男」…」という具合に。そして、「俺たちは、黒人たちは凶悪な敵だというイメージを刷り込まれ、すっかり洗脳されちゃっている」と述べている。

ムーア氏の映画『ロジャー&ミー』では、生活保護を受けている白人女性が棒でウサギを殴り殺す場面があるようだ。このシーンはアメリカ映画協会がR指定にし、様々な方面から批判され続けてきたという。しかし、ウサギ殺しのわずか2分後の、黒人が射殺されるシーンには批判が全く寄せられなかったという。「黒人が射殺されるシーンなんてのは当たり前のことなんだ。俺たちはみんな、黒人が殺されるのを見慣れている一映画でも、ニュースでもだ」、と著者は述べている。(H)